

土

淨

號 月 四



昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一冊一日發行）
昭和十八年三月廿日印刷納本・昭和十八年四月一日發行

第九卷 第四號

陸海軍 病院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇一口一圓五十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇御送金は浄土宗務所事務變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

東芝 京公 芝園 區地 淨土宗務所

振一 替五 口一 座一 東一 京番

知恩院門跡
淨土宗管長
法增上寺主

郁芳隨圓猊下序・増谷文雄著
大島徹水臺下

新刊

行誠上人

◇近世不世出の高僧、行誠上人の全傳成る◇

謹嚴にしてしかも脱俗洒々たる上人の風格は最大の魅力！上人の言行がそのまゝ信仰である。

學識に徳行に一世に秀でた上人によつて、廢佛毀釋にあつた佛教界が指導された。更にまた上人の和歌、詩、書、畫はみな一流一家をなしてゐた。文の簡麗なる、筆の猷美なる他に求むべくもない。上人に傾倒する著者が渾身描き出した興味つきざる近來の名著。

B6版二百三十頁
定價一圓五十錢
送料十二錢

言説・行業は直ちに讀者
を感化せずにおかない!!

内 容

口繪・序文

一、學僧としての行誠上人
上人はかく學び給ふた・學問に於ける主張と業績

二、高德を偲びて

上人の風格のこと・芳躅をたどりて・遺書につきて

三、御一新の渦中に立ちて
廢佛毀釋の真相につきて・肉食妻帯とたたかふ・毅然として讖見を持す

四、上人の文藻に就きて
上人の短歌に就きて・上人の紀行につきて・上人の詩と書と畫につきて

附 録

著作解説

年譜

發行所 法然上人鑽仰會 振東京市芝公園八二一八番七番
館會照明國公芝區京東



浄土四月號 目次

表紙・扉・目次カット

中島保

樂し い 花 祭 り……………安藤嶺丸(二)

聖典 今ぞ意味ある「地獄の繪」……………大野法道(三)

白梅の咲くころ……………吉田絃二郎(四)

西 空 に つ い て……………佐藤賢順(五)

防 空 必 勝 の 信 念……………菰田康一(八)

名 鐘 音 の 中 に か く れ る……………尾上菊五郎(一〇)

信 仰 相 談……………(三六)

報 國 會 だ よ り……………(一五)

ほ と け の 國 佛 塔 に つ い て……………萩原賢次(一六)

土 産 話 佛 塔 の 先 達……………横井淳道(四〇)

歌 壇……………岩野喜久代選(元)

俳 壇……………太田耳動子選(四)

漫 畫 撃 ち て し ま ン 漫 畫 協 團……………(二六)

石 も 船 に 乗 せ ら れ て ゆ く……………中村辨康(四五)

編 輯 後 記……………(四九)



淨土 四月號

六方恒沙の諸佛、舌をのべて三千大千世界におほひて、もたらだ彌陀名號をとなへて、往生すといふは、これ眞實なりと證誠し給ふ也。これ又念佛は彌陀の本願なるが故に、六方恒沙の諸佛是を證誠し給ふ也。

法然上人御法語



保愛



白梅の咲くころ

吉田 絃二郎

庭の梅も眞盛りになり、朝ごとに鶯も鳴いてゐるが、今日は夕方から眞冬のやうな寒さになつた。今夜あたり雪でも降るのであらうか。

日の暮れない間にと、思つて家の周囲を廻り枯枝を拾ひ集めて置いた。このころでは枯枝を拾ふのはわたくしの仕事になつてしまつた。竹林の隅の小屋へ行つて犬舎の雑糞運んで来たころは日もまつたく暮れてしまつた。

焚きつけの枯枝も拾ひ、犬舎の寝糞もすつかり準備ができたので、今夜雪になつても案じることはない。麥作のためにも今夜あたり雪になつた方がいゝであらう。

火鉢の火を掻き立て、書齋にこもつてゐると、雨戸一枚へだてた縁の下では犬が寝糞を掻いてゐる音が聞

えて来る。たゞ一人の主人を頼りに生きてゐる犬のころをあはれにも思ふ。

犬の寝糞を掻く音を聴きながら、一塊の木炭を火鉢に注ぐ。じつと眞つ黒な炭を見守る。炭はやがて赤くなり、冷たい指先を柔かに、温かについでくれる。黒い炭が赤くなつてゆくのを不思議な心持ちになつて見守る。幾十年の間見て来た物理學的な事實であるに過ぎないが、それを今更のごとく見守る氣になつたのも戦さのおかげである。

一塊の炭を見守つてゐる間に、わたくしの眼底には深い雪の中に黙々として木を伐り、炭を焼いてゐる人の姿が映つて来る。雪の山路を下つて炭を運ぶ人たちの勞苦が泛かんで来る。

今は日本中の人たちがわたくしと同じやうな心を抱



いて火鉢の炭火を見守つてゐるであらう。日本中の人々がお互に感謝しつゝ生きてゐるであらうことを考へると、まつたくありがたい。

天恩、佛恩を感じない者は救はれない人間である。

しかしお五人間同志の恩を感じない者も救はれないであらう。いや、わたくしたちのために田を耕してくれる牛馬の恩も忘れてはならぬ。夜を守つてくれる犬、朝ごとにわたくしたちの夢を静かに揺り、さましてくれる小鳥の恩も忘れてはならぬ。路傍の野草一木の恩をも忘れてはならぬ。夕空に漂ふ雲の恩をも忘れてはならぬ。このすべての恩を忘れぬ心がけこそまことの宗教である。神佛を念じつゝ草木を踏み躪る者がありとすれば、それは似而非宗教家である。

一塊の炭、一粒の米に對して、生み出す人々の勞苦を感じてやうになつたわたくしたちの生活は今初めて本然の姿に立ち歸つたのである。このころは更に進んで、一本の木、一粒の米そのものの犠牲に對する感恩の心と結ぶであらう。

戦ひが長くなれば長くなるほど、わたくしたちの物的生活が窮屈になれば窮屈になるほど、わたくしたち

の心の生活は一層豊かにされ、高くされなければならぬ。わたくしたちはたしかにその尊い機縁を、現在に於いて恵まれてゐる。眞理は飽食暖衣の生活とは對蹠的な存在である。眞理は窮乏と忍苦にのみ潜む。

上杉謙信といふ人は戰國時代に在つても特に勇敢無比な武將であるが、あの偉大さは何處から來たのであらう。一言にしていへば謙信はまことの世捨人であつたからだといふことができる。目柳燕石は楠公をうたつて日東有「聖人」。其名曰「楠公」。誤生「于」世。提劍作「英雄」と言つてゐるが、この詩はまた上杉謙信の場合にも言へる。

謙信が聖人であつたか何うかは考へて見なければならぬ。謙信は少くとも高僧であつた。清僧であつた。四十九年の生涯を清僧のごとく嚴かに戒律を守り通した。綿服を纏ふては禪僧のごとく一生妻帯しなかつた。食も一汁一菜であつた。二十七歳にして城を捨て、佛門に入らんとして人々を驚かした。

「極樂も地獄も先は有明の月ぞ心にかゝる雲なき」
とうたつた淡々たる謙信の心はまさに聖僧悟入の境



に詣つたものといふべきであらう。

淡として水月のごとき心境に住してゐたればこそ、謙信はたゞ一騎敵中に飛び込んで信玄を斬ることができたのだ。信長や秀吉や家康にはそれは望めないことであつた。かれ等には天下を取るといふ慾念があつたからだ。

謙信は世捨人であつたから、生死は問題でなかつた。況んや領土を擴げるといふやうなことは問題でなかつた。かれは聖僧であつたればこそ宿敵武田信玄に鹽を送り、且つ信玄の計に接しては落涙したのである。もし太平の世に在らば楠公は聖人の生活を送つたであらう如く、謙信も亦聖僧として佛に仕へたであらう。

偉大なる武人が聖僧であつた如く、偉大なる天文学者も數學者も醫學者も音楽家も聖僧であつた。神佛を恐るゝことを知らぬ者は俗人である。かれは世間的には成功し、時代の寵兒となり、凡愚の喝采を贏ち得るであらう。しかしかれは終に心の世界に於いて一介の乞丐たるに過ぎない。

因縁といふか、ともかく人間の世にはいろいろなつ

ながりがある。二十餘年前のことである。わたくしと亡妻は京都あたりの旅にゐた。或る夜のことであつた。駄屋町の宿を出て京極に文樂を聴きに行つた。源太夫の「堀川」を聴いて往來に出たところは雪が降つて來たそのまゝ宿にかへるのも惜しい氣がして、加茂川に沿うて歩いたが、川原には千鳥が啼いてゐた。千鳥の聲を聞きながらわたくしたちは雪の夜の暗の空に鳥邊山のあたりを探したりした。

その夜のことは今でも忘れがたき京の印象となつて刻みつけられてゐる。ところが數日前のことであつた文樂座の未知の若い人が訪ねて來て故人の佛前で「堀川」を一段語つてくれた。

今は源太夫も世に亡き人の數に入つてしまつたが、その折の相三味線を弾いてゐた人は現在の仙絲でありわたくしを訪ねて來た人は仙絲の愛弟子にあたる人である。かつて京の旅に妻と二人で加茂川の縁に雪の夜の千鳥を聞いたをり、二十餘年の後妻の遺骨を擁いてたゞ獨り「堀川」を聴かうなどと夢にも思はないことであつた。わたくしは佛前に坐してしみじみと、「堀川」を聴いた。



窓近く紅梅のかほる朝であつた。

昨日は日本アルプス中房温泉の主百瀬さんが突然歿くなられたといふたよりがあつた。故人の句碑を燕の中腹に建てゝいたゞいたをり中房に出かけて行つたが氏はとても元氣な人であつた。去年上京して見えられたので裏の竹山に案内して筍を掘つて上げたが、それがお別れになつてしまつた。

信濃路の春まだあさしけさの旅

今日はまた木村玄俊師の計を聴く。妻が亡くなつたをり七日七日においで下さつて、懇ろな御回向をいただき、竹の丸窓に端坐せられて音楽のお話などを承つたことをゆかしく思ひ出す。鹿ヶ谷の法然院の萬里小路さんといひ木村さんといひまことにゆかしい聖たちでおはした。晩春の細雨を聴きつゝ静かにお話を承るにふさはしい聖たちでおはしたが、悲しいことである寂しいことである。

白梅に月なき夜半の寒さかな

陸海軍病院慰問「淨土」

寄附者芳名（敬稱略）

- | | | | |
|--------|--------------------|-----|-----|
| 五圓 | 蘆屋市打田内田五 | 池田 | 吉兵衛 |
| 七圓 | 福岡縣瀬高町上庄來迎寺 | 筑場 | 哲舟 |
| 一圓 | 臺灣斗六街斗六 | 三四三 | 柳村 |
| 五圓 | 東京市本郷區蓮光寺明照婦人會幹部一同 | | |
| 二圓 | 東京府北多摩郡小平村傷痍軍人療養所内 | | |
| 五圓 | 佐賀郡伊萬里町木須四一五 | 島本 | 稻惠 |
| 一圓五十錢 | 京都市中新町佛光寺北入 | 副島 | 喜代治 |
| 一圓五十錢 | 京都市蒲田區女塚町二ノ二〇 | 中村 | 鶴之助 |
| 十圓 | 東京市神田區田代町八 | 欣淨 | 寺 |
| 一圓五十錢 | 東京市蒲田區女塚四ノ一五 | 吉田 | 耕作 |
| 一圓五十八錢 | 樺太本斗町 | 松本 | 太郎 |
| 十五圓 | 朝鮮鬱陵島淨土宗教會所 | 開教 | 寺 |
| 三圓 | 朝鮮鬱陵島道洞 | 井上 | 哲巖 |
| 一圓五十錢 | 奉天皇姑區大成街一段農事大學内 | 藤野 | 金太郎 |
| 一圓五十錢 | 福井縣吉田郡中藤村 | 武村 | 治吉 |
| | | 佐々木 | 惠祐 |



防空必勝の信念

東京市防衛局長
陸軍中將

菰田 康一

防空訓練はその回を重ねるに従つて技術が向上し、意氣旺盛にして真摯敢闘の度を加へ來つた。また他方各種の施設、各家の準備はやうやく萬全を期する迄になつた。かくて今や防空に關しては完成の域に近づき、何時どの方面より敵機が來襲するも、われわれは恐るることなくこれを撃退するの確信を有してゐるのである。

昨年四月十八日に初めて敵機の空襲を受け、早くも一年が経過した。かの際は史上にその例を見ない片道爆撃といふゲリラ空襲にすぎず、被つた損害も極僅少であつたのであるが、われわれはこれによつて次のやうな點を知り得たのである。その第一にはこの空襲で敵

ははからずもその本性を暴露し、徒らにわれわれの敵愾心を燃え立たせたことである。元來敵國の國民性はわれわれの想ひも及ばぬ慘虐性を持つてゐる。史上にみる敵國の慘忍さは讀んで目を覆はしむるものがあり、口に出して談り得ない程度のものである。

かの敵機が國民學校の運動場で嬉々として群がる兒童を機銃掃射した如きも、人によつてはこれを恐らく敵機が周章狼狽のため誤つて行つたものと考へた人もあつたが、それはわれわれの常識で考へての想像であつて、實は彼等は兒童と知りつゝ尚掃射を加へたのである。憎んでも餘りある敵の本性はかくわれの眼前に暴露され、彼等の劣悪な性根を見

せつけられたのである。

次に第二の點は、航空機の有する特性からして、又近代戦の特色からして必ずや本土に空襲があるとなねばならぬことである。敵はこれまで敗戦に敗戦を重ねて、いよく今年こそは乾坤一擲の反撃を企圖しなくてはならなくなつた。又他面には米國の膨大な各種計畫が漸く實現しかかつてゐるし、軍需生産に必要な勞動力、蓄積しあつた軍需資材からみて米國の軍需品生産力は今年が最も好都合の頂上なのである。従つて敵は今年こそ機を逸せず大反撃に出て樞軸側に決定的打撃を與へるべく決意してゐる。いやすでに敵の反撃は實行に移されてゐるのである。しかし如何に

敵が死にもの狂ひの攻撃を試みて、われわれは世界無比の皇軍の偉力に信頼して聊かも疑はぬのであるが、現代の航空機は皇軍の目を盗んで本土まで来襲し得る可能性があるし来襲を絶対に拒止することも亦技術上出来ないものである。

さて第三の要は敵機の来襲に對しては官民が一體となつて協力し、よく攻撃精神と必勝の信念とを堅持し、動作の確實を期するならば容易にこれを撃退し、更に損害を被つたとしても極く僅少に止められるといふ事であるもとく焼夷弾は機敏に適當な處置を施すならば完全に消し止められるものである。逆に若しこの處置にして不十分であつたなら、それこそ彈は猛威を發揮して相當の被害を受けるは勿論である。われわれが直接攻撃すべき敵は來襲する敵機ではなし、落下した爆彈であり焼夷彈であり、更にこれらに依つて生ずるであらう火災なのである。總て戦ひは勇猛果敢に沈着大膽に身を以て敵を粉碎せんばやまないといふ攻撃精神が必要である。機

夷彈は發火と同時に猛烈な火煙と煙とを發し見るからに猛威を思はせるのであるが、平素の訓練通り剛毅不屈の精神で彈に打ち當つたならば、案外容易に立どころに消しとめられるものである。それを少しでも躊躇せんか忽ちにして威力を發する。従つて飽くまで一貫して攻撃精神を以て事に當る事が大切であるまた必勝の信念とは焼夷彈に對し必ず勝つ信念で、かく信すれば常に勝つ力が生れるのである。實際には夜間に突如として爆彈と焼夷彈が一時に多數落下するかも知れぬ。かく慘烈を極むる情況にあつて尙毅然として必勝の信念を持ち得るのは、平素から總ゆる場合に處し得るだけの訓練によりはぐくまれた實力に依るものである。即ちこの根本となるものは千磨必死の訓練であるといふ事となるさて今ここに焼夷彈が落下したとして、平素の訓練通り共同動作もあざやかに彈に突進して行つたとして、いざ燃えあがる彈の火焰を消すものは投げ込まれた水であり砂であり庭であるわけである。ところが若しもこの水

砂がバケツに半分しか入つてゐなかつたり、投げた庭が火の中心から外れてゐたとしたら到底消火の効果は望めないことになる。故に平素は如何に多量の水、砂が用意され、消火に當つて一致協力機敏に動作しても、その動作にしていささかでも確實を缺き、人の手から手にバケツが移つて最後に火焰にかけられる時にバケツの半分しかなかつたら、何のための用意と訓練かといふことになる。

しかも實際には彈を發見して最初に馳けける人は多くて三、四人位に過ぎぬであらう而してその動作は訓練の場合に比し不確實になると思はねばならぬ。又平素はこれで十分と考へられた準備も實際には不足になることが多い。このことを思へば萬全の準備を整へることは實に容易でないことが判る。今後われわれは實際に焼夷彈を受けて、用意の用水桶や砂を以てして消せなかつたといふことの萬々一にもないやうに、ますます準備を完全にし、訓練を重ねて研究をこらし、防空必勝の信念を強固にしなくてはならぬ。

談藝人名

るれくかに中の音鐘

(談) 郎五菊上尾

坊さんと役者：…何んだか突拍子もない取合せですが、丁度私が今以て一生教訓にしてゐる面白い藝談がありますから、それをお話しませう。私がまだ二十四、五の頃、一つ禪の修業をしようと思立つたことがあるんです。

そこで丁度その時北海道の杉浦さんといふ方の鎌倉の左佛庵といふ別荘に曹洞宗の大本山、福井の永平寺の當時の貫主森田悟由禪師が御滞在を幸ひお訪ねして教へを乞ひました。

その時の森田禪師の第一問はかういふのでした

「あなたは舞臺をつとめる時に、菊五郎が演るのだと思つてやるのか、それともその役柄になつてやるのか：…」
勿論私は及ばずながらその役柄になつて演つてゐる心算なんです。例へば大名なら大名、乞食なら乞食の心掛けでその者になりきらうとつとめてゐます。だからそのことを禪師にお答へすると、禪師はかう云つてくれました。

「それでよいのだ。それがつまり禪なのである。あなたが舞臺でその役柄になり切つてつとめてゐることが、われわれが禪によつて到達したいと努めてゐる境地なのである。あなた方は職業がらくく自然に、しかも樂に自分をなくし菊五郎といふ自我をなくすことが出来るのである。自分を無くするといふことが何より大切なので、われわれも大いに努力してその境地に達しようとしてゐるが、仲々その境地に入れないでゐる。それをあなた方はすでにその境地に到つてゐる。若しあなたがほんとに役柄になり切つてゐるなら、事更に禪などといつて黙つて坐つてゐる必要がないのである。ほんとの道は何れも、同じ境地に達するものである」。

かういはれてから、今度は第二問を發せられました。
「如何なる乎、これ松樹の心」

この問ひは私には判りませんでした。松の心つて一體何んのことですかと、見當もつかないので卒直にお質ねしたんです。すると禪師は、松の樹はいつも緑で、亭々とそびへ立つてゐるがこれにも立派に心があるといふのです。若し私が舞臺の上でほんとに自分を無にして役柄になり切つてゐるなら、松樹の心も判る筈である、と教へて頂きました。そして更に續いて第三問を發せられました。

「鐘の音の中にかくれることが出来るか」

いよ／＼面くらひました。音の中にかくれる等はとても



判りません。そこで釣鐘の中に身體をかくす位のことなら私にも出来ますが、どうも音の中にかくれるなんて、一體何ういふことなのでしょう。とお質ねしました。

すると禪師は又先程と同じやうに教へてくれました。若しほんとに自分をなくして役柄になり切つてゐるのなら鐘の音の中にかくれることが出来るし、その境地も判る筈である、だから更に一層その心算で努めたらよいであらうと懇々と諭して下さいました。

×

×

それ以来、私は森田禪師のお教へこそ一生の教訓である私の一生をかけて、この事を悟るやう努力しよう、心に決めました。丁度歌舞伎座の三月興行に、私は京鹿子娘道成寺を演りましたが、この外題について一つの思ひ出があります。

忘れもしません。昭和十一年四月のこと矢張り同じ歌舞伎座で道成寺を踊りました。ご承知の通りこの所作は清姫が安珍を追つて日高川で死んだといふ話の後日譚で鐘供養の日に清姫の怨霊が白拍子花子に化けて訪ねて来て、例の「鐘に恨みは数々ござる」と踊るのですが、その踊りの終

りに釣鐘つりかねが落ちて「鐘入り」になり、一端釣鐘の中に身をかくしてその中で扮装ふんさうを真蛇まへじやにかへて再び舞臺に表はれます。この釣鐘の中での、こしらへ（扮装をかける事）はいつも私と弟子の鯉三郎りっさろうと二人きりでやるのですが、僅か五分間位しか餘裕がありません。殊に釣鐘の中ですから場所は極く狭いし、何にしろあの娘姿をすつかりぬいで素裸になつて後ジテの衣裳をつけたり顔の拵かこを代へるのですから随分忙しいわけで、餘程手際よくやらぬと間に合ひません

×

×

さてその興行で或る日のこと私は白拍子花子を踊つてからいつものやうに鐘の中に入りました。鐘の中に入つたには入つたが、私は何もするのがいやで黙つて立つてゐました。鯉三郎がいつもと違つて突然として立つてゐる私をみて、不思議に思つたのでせう「師匠、何うしたのですか、早くしないと間に合ひませんよ」と聲をかけました。かういはれて、私もぼんやり立つて何もしようとしないうでゐたのに氣がついたのですが、その時つゝ私は「このまま死んでしまひたいよ」と口走つてしまひました。

時間は迫るし間に合はぬと大變なので心配してゐた鯉三

郎が、いきなり私から死にたいといはれたのですから悔りしたにちがひありません。後で鯉三郎もあの時ばかりは師匠が氣が狂つたのではないかと思つたといつてゐました。それでも、あつしは鯉三郎から急かれて何うやら衣裳もかへ、その時はそのまゝ無事に舞臺をつとめることが出来ました。然しその時ばかりは私はほんとに死んでしまひたいと思つたのでした。前に申した森田禪師のお教へを頂いてから尙のこと役柄になり切るやう努めてきました私は、この時の白拍子花子の踊りほどわれながらほんとに氣持よく踊れたと思つたことは他になかつたのです。清姫の怨靈になり切ることが出来たのです。そしてこれこそ鐘の音の中にかくれることが出来たのだと思ひました。ところが凡夫の悲しさで、いつまでもこの境地を持ち續けてゐることが出来るかどうか、蛇身になつて舞臺に出れば、もうその時はこの境地、折角達し得た境地から抜け出してしまふのではないか。やつとのことで鐘の音の中にかくれることが出来たのに、次の踊りではもうそれをなくしてしまふ、といふよりその時以後にこんな境地の踊りが果して出来るかどうかそれが悲しくなつたのです。だから本當に死んで仕舞ひたかつたので、そのまま死んでしまへばそれこそ本望で

あつたのです。

「祈り」の所作があつて、鐘が上り、鐘が上つてみるとそこに私が死んでゐたとしても、快心の踊りが出来た菊五郎

がそのまゝ最後の姿となつて舞臺の上に残されてゐたことになると、私は本望であつたのです。それによつて六代目が滅びてしまつても、私は少しも悔いる所がなかつたのです。

ところが凡夫のあさましさで、やつとのことで鐘の音の中にかくれることが出来たのに、その三昧の境地のままで日々の踊りを續けてゆく事は種々な條件にさまたげられて



未だに私には出来ないのです。恐らくあの日の踊りは私にとつて初めてのことであると同時に一生の内でもまたないものであつたかも知れません。

×

×

まあこんなわけで今でもほんとに役柄になり切つて、菊五郎といふものをなくしたいと努めてゐます。例へば山本有三さんの「坂崎出羽守」を演つてゐる時などは、普段の私まで不平不満の焦らだたしい氣持になつてしまふと見えて、家内をはじめ内弟子や女中まで、こんな時にはなるたけ私の氣にさからはぬやう氣を配つてゐてくれるのだが、一寸したことにすぐ叱りつけ、小言が出てしまふんです。

尤も是れもまだ本當に悟りきれない情なさでせうが、舞臺の上でほんとに役柄になり切るためには舞臺の上ばかり

でなくとんだとばつ尻を家にまで及ぼすのでよく家内ものから「坂崎」の噂が出るとひや／＼するとこぼし話が出る位です。

それからよく世間からとかく菊五郎は怠けるとの悪評をうけることがあります。勿論舞臺の上では毎日毎日同じことを繰り返してつとめてゐるには違ひありませんが、しかし私の氣持が毎日毎日が同じであるといふわけにはゆきません。私の氣持がよくその役柄になり切つてゐることもあるし、何うもなれない時もあります。こんな時に私の氣持を偽つて舞臺の上だけよいやうに役をつとめることがどうしても出来ないのです。高い觀劇料を拂つて來て下さる御客様にはお氣の毒だと思ひ乍ら私の氣性としてお客さまに阿るやうな藝を演ることが出来ない、私の氣持にないやうな所作が出来ないのです。

だから十分役柄の氣持になつてゐない時は、何うしても無理が出る、それが菊五郎は怠けるといふ、悪評になるのではないかと思ふのです。

その代りほんとに自分から今日こそ氣持よく踊れさうだと思ふ時はたとへお客さまが二人でも三人でもよい、いや

誰も見てゐない所でもよいから思ひ切つてその踊りを踊つてみたいといふ衝動にかられます。全くこんな時は何千人といふお客も何にも私の頭の中にはなくなつて仕舞つてゐて私自身が藝に酔つてゐるのだと言つた方が本當かも知れません。

然し藝ばかりは依固地なもので、殊に私達のやうな舞臺人は自分一人で演るのではないので、今日こそはと思つても、側の俳優なり伴奏なりがうまく行かすその氣分がこはされる事もあります。又それほど期待せずに舞臺へ出ても種々の條件がうまく整ふと自然に引入れられて思はず快心の舞臺が務まると言つた譯で、到底自分自身にさへ豫測する事が出来ません。

然しましたこゝに藝の有難さなり面白味も有るのだと信じてゐます。

かうして今だに森田禪師のお教へを守つて「鐘の音の中にかくれる」修業を一生を通じて積んでゆきたいと思つてゐる次第です。

〔寫眞 尾上菊五郎丈と、その扮せる娘道成寺の白拍子花子の舞姿〕

◆報國國會◆だ◆よ◆り◆

報國會のこと

今時の戦争はわが國運を賭しての武力戦、經濟戦、思想戦であります。ここにわれわれは自勵自戒して日夕身心の鍛錬に努め、祖先傳持の信仰生活に徹底し、進んで勤勞奉仕に當り以て宗教報國運動に挺身せんとするものであります。かくて淨土宗報國會が結成され五百萬の檀信徒各位の協賛を得て着々整備されてゐます。同會は會員から年額二十錢の會費を徴收して次のやうな事業を行います。

- 一、奉公精神の昂揚
- 二、宗教的生活の徹底
- 三、勤勞奉仕の實踐
- 四、報國隊員の結成
- 五、指導員の養成

- 六、各種團體の統制
- 七、支部の指導及聯絡
- 八、興亜教化財團の組織
- 九、その他必要な事業

報國會の運動は開始されてまだ日が浅く、各府縣支部の發會式を漸く終り實動に入つた所であり、事業もその緒についたばかりであります。が、本部事務局の積極的活動と各支部の創意的活動とによつて活潑なる進展をみつつあることは御同慶にたへません。このことも一段の御力添へをお願いいたします。

會歌の音盤吹込み

先頃報國會で懸賞募集した會歌（高津ときを氏作歌、長妻元止氏作曲）が報國會合唱團によつて音盤に收録されました。御希望の方

には實費一枚二圓五十錢にてお預けいたしてゐますが、少數御購入には郵送の方法がつかねますので、只今のところは直接御來訪の各位の外はお求めに應じ兼ねて居ります。

外苑にて勤勞奉仕

去る二月二十三日東京及び近縣六教區の寺院六十名の方々の尊き汗によつて宮城外苑整備作業に勤勞奉仕されました。

知名の檀信徒へ

「淨土」を寄贈す

全國知名の檀信徒の方々へ二月から「淨土」をお贈りいたしました。

これに對し各位から御丁寧なる書面又は芳志を頂きました。厚く御禮申し上げます。その書面の一部を左に記します。

拜啓餘寒尙は難去候處益々御清

適の段奉慶賀候、戦時下國民の

精神指導の必要を痛感せらるゝ

の時御熱誠なる宗教報國の御精

神によつて國民の宗教的御指導

に挺身の段謹而敬意を表し深く

感謝致し居り候處此度貴會の教

化機關誌「淨土」一部御惠送に

預り難有拜授仕候茲に書中厚く

御禮申上候 敬具

紀元節佳節 山内保次

淨土宗報國會長里見達雄殿

前略此度は僻障の地當地へ御誌

淨土御送附に預り難有厚く御禮

申上候自らの心の糧と致すは勿

論兵精神教育の參考とも致すべ

く目下酷寒に候へ共將兵一同士

氣極めて旺盛一意御奉公申上居

候間御安心被下度先は右御禮迄

勿々

東安省寶東

滿洲第九三六部隊長

松村千代喜

淨土宗報國會御中

ほとけの國土産話

パコダ
佛塔についで秋原賢次
文と画

泰緬國境を越えてビルマに入つてから、その夥しく點綴するパコダに目を奪はれると共に、且つ驚いたものである。關貢へ、關貢へと向ふトラツクから、金色に或ひは白色に遠く近く過ぎ去るパコダを、ありがたく眺めてゐた。がたくと揺られ乍ら今更の如くに

ビルマ人の信仰の厚さの程を知つたのである。私達一行の中には、戦前ビルマに居を構へてゐた人が多せい居たが、その人達は近くを過ぎ行くパコダには必ず手を合せた。私は眺めて唯だ驚いてゐただけであつた。村落にはそれが如何に小さな部落であつても――

ダゴン・パコダを見た時には、既に喫驚の感性になつており別段珍しいとは思はず、もう厭き／＼した顔色で見上げたのである。關貢には、シュエタゴン・パコダの外に、スレー・パコダと言ふ大きいのが、關貢市の真ん中に控えてゐるが、何んと言つてもシュ

大小二つや三つのパコダは屹度立てゝあつた。村を出て一望千里の原野を通り過る際にも野の果、岡の上には屹度輝いてゐた又、山に入れば海拔二千、三千と思はれる、人跡まばらな山の頂にも高く聳えてゐた。何時誰か建てたかわからないものだらう。よくある俗信徒共の我名おひろめ奉納なぞとは大分かけ離れてゐる様である。

兎に角、これ等のパコダには色々と驚かさせられ續けで、關貢に入つてビルマ第一、パコダの王様とも言ふはずの、シュエ

エダゴン・バコダの大きさには敵はない。高さ五百尺と言ふ人もあるし、又三百五十尺と答へる人もある。私は測つた譯ではないからどちらが正しいか知らない。何れにせよ、雄大な點でビルマにバコダ多しと言へども、この右に出るのが無い事は確かである。シュエダゴン・バコダはローヤル湖と言ふ大きな湖水のほとりに聳え立つてゐて、風光も又、明媚である。バコダの前には二丈程もある二頭のライオンの石像がバコダに尻を向けて門番を相勤めておる。一見、日本の狒犬の様な恰好で、初めは犬だとはかり思つてゐた。この門番は大抵のバコダにはある。新しい時分には彩色がほどこされてあつたものらしく、ところ／＼に古くなつた、多のくの跡が残つてゐた。

中秋の一夜、月見に行かうと友人と二人で散歩に出掛けた。ローヤル湖は月見なぞには至極適した所なので足はその方角へ向つた。月が上るにつれて湖畔のバコダは淡い金色に輝いて美しくなつた。綺麗だから側まで行か



う、と正面にバコダの見ゆる道を歩き出した。月が上りきるとバコダは、氣味の悪いまでに青白く光つてきた。石のライオンの所まで來た時には、二人共ゾツとして引返す事に話をきめた。月見は此所で終つた。天を突く様な青白い物體と、巨大な二頭の怪物は二人の月見客の膽を冷したのである。

話が横道に外れ、とんだ怪談になつてしまつたが、實際、月の夜に青白く光る異様なバコダはあまり氣味の悪いものではない。「バコダの中には一體、何が入つてゐるんだい」日本へ歸つて友人から、たまたまこの種の質問をされるが、ビルマ在住半年有餘未だこれには判然とした答へが出来ぬ。たゞ向ふに居た時、聞いた中に死んだ人々の位牌が入つてゐるのだと知らされた事があつた。成程そう言へばビルマにはお墓といつたものが一つも無かつたし、又家にある佛壇には釋尊の像が安置してある外には故人の位牌らしき物は見當らなかつたから、或ひはこの話は本當かも知れぬと思つてゐる。

バコダの中と言へば、私はこの中へ遂に一度も入らずに終つた。それは、一日見物するつもりでバコダへ出掛けた所が入口には日本の文字で「靴を脱いで入る事」といかめしく立札が立つてゐる

ライオンの石像



に中の石像が南の陽の直射でとても熱さうであつた。

斯様な譯で、私は覗くだけにして、又、何日の日か改めてと踵を返したが、それ以來遂にビルマを去る日まで

入らなかつた。内地に落着いた今

これには辟易した靴を脱ぐ事は立札を見るまでもなく承知しておつたが靴下までとは豫期しなかつた。ソツと中を覗いてみたが、なか／＼穢いそこで考へてみた



だけに徹底してゐるところがある。戦闘中、不幸敵の砲撃の爲にこわれたバコダなぞ自分の家がやられてゐるのも返り見ようとしないうで、先づバコダの修理に着手する

とに角この中に入る善男善女の多くは、往來を歩くのにも始終裸足である、その足を裸足なら良しとは言ひ乍らそのまゝで、此のバコダの中へ入る、汚れる譯だと思つた。其の上

昔咄集

星を落す

小僧あり。小夜更けて長棒を持ち庭をあなたこなたと振り廻し、坊主を見つて「何事をするぞ」と問ふ

「空の星がはしさに打ち落さんとすれども落ちぬ」といへば「鈍なる奴や。それほど作が無うて智慧がないことなる物か。そこには棒がとどくまい、屋根へ上れ」と云はれた。

(寛永五年改行の醜睡笑)

させる

客二人あり、煙草盆一面出す。喜勢留一本あり。一人の客そのきせるとり、吹いて見るに通らず、紙捻をして吸口に通し、吹けどもまた通らず。側の一人「そのきせる早くよこしやれ」といふ。「ハテせわしない」と云ひながらいろ／＼して通せど通らず、側の客腹を立ち、早く寄越しやれとひつたくりにかゝる。「やれせわしない」と渡さねば、亭主見兼ね勝手の方を覗き、「コリヤ誰そあなたへも一

シエダゴン
パゴダの入口で合掌するビルマ人



のがビルマ人である。
パゴダを建てる爲には、金持も貧乏人もが己が財産をこれに投げ出すのを無上の光榮としてゐるのがビルマ人である。

パゴダをお詣りする人達は毎日々々集り來

浮ぶ様である。特に先日、シエダゴン・パゴダの爆撃には、少なからず私の胸も燃えたのであつた。

(筆者は陸軍報導班員)

り、只管、
佛の本願に
生きているので
ある。

昨今英國
機の道を外
した爆撃に
大々にパコ
ダが破壊さ
れてゆくの
を内地の新
聞で讀み乍
ら、何如に
ビルマ人が
憤慨してゐ
るかが目に

本通らぬさせるを持つてあげろ」(安永元年
刊鹿之子餅)

徒然草

ちと假名を讀む人の云ひけるは、此程つれ
づれ草をさい／＼見てあそぶがおもしろう候
よとありしかば、その座に居たる者のさし出
で構へて「かまへて口あたりよしと思ふて多
く御みるな。つれ／＼草のあへ物も過ぐれ
ば毒ちやと聞いたに」(寛永五年刊醒睡笑)

借錢乞ひ

友達の方へ錢五百文の無心に行き、成程貸
しは食さうが、明日の晩は是非々々なければ
われら甚だ大難儀になる。きつと返すならば
と儀定して貸したり。さて翌日晩になりても
返さず、是非なく催促にゆき、「昨日の錢は外
より預り物にて、今宵先へ返さねば、我ら言
譯に首でもくゝらさばならず」といへば、借
主「マアさうでもして間に合はせて下さい」

(安永八年刊、壽々葉羅井)



西峽廬
雜記

空について

佐藤賢順

わが國の繪畫・文學・學術を初めとして茶道・華道などの趣味生活から、日常の起居・動靜・語默の末に至るまで、國民生活の文化的な發達を顧るならば、一條の著しい傾向が歴史的に貫いてゐるのを見出すに容易であらう。それは他の國の文化史に於いては、見られぬ所のもので、他の文化の歴史にもしこれに似たことがあるとしても、極めて稀なことである。それは一言で言ひ表すならば、否定の道を選ぶことによつて、却つてより以上のものを肯定的に表現する態度とも言ふべく、全體を生かすために、ひとつ一つを否定する傾向である。このやうな否定的な傾向は、わが國の美術や文學の歴史に於いては、脊梁をなすと言つても過言ではなく、日本文化の日本的なる理由も、過半はこの傾向にあると言つてよい。

水墨畫に見る極端な手法の省略は、勿論、簡雅枯淡を狙ふのであらうが、簡雅枯淡とは何であらうか。必要のものの外は、凡てを省いて、ただ一點を強く深く描かうとすることであらう。茶室の床に

活けられた一輪の花は、その周圍にこれと競ふものが何もないからこそ、大自來の「花」を表現する。西洋人の應接間のマンテルピースの上を見ると、持つてゐるだけの珍らしいものを皆並べてゐる。同じ部室の中に二ヶ所も三ヶ所も花が花瓶にばい挿してある。博物館の陳列棚のやうに澤山の品物を並べるのは、結局互に相殺し合つて、何物をも表現しないと同じことになつてしまふ。これに反して、否定の道を選ぶ藝術や趣味生活は、表すべきものを表さないといふ單に消極的な態度ではなく、却つて、個々の否定によつて、最も効果的により深くより大きいものを躍動させ生動させるのである。

ただに藝術や趣味生活にとどまらず、實に日常の喫茶喫飯、行住坐臥、一動一靜、一往來に至るまでこの心持が現れ出てゐるのである。

このわが國の文化や生活に於ける否定的な傾向は何に基くであらうか。

それは佛教がわが國に渡來してよりこの方年月と共に次第に廣く國民生活へ浸潤して、わが民族の豊富な生活内容の一つとなつた空の人生觀・世界觀である。これが美術に文學に、思想に生活に、姿を變へ形を改めて、否定の方法による文化として現れてゐるのである。

空は佛教の最も根本的な人生及び世界の觀方で、もし佛教といふ名で呼ばれてゐるもので、この根本思想を缺いたならば、それは佛教とは言はれないほどに重要な思想である。大乘佛教は言ふに及ばず、溯つて小乗佛教も、更に溯つて原始佛教も、深くこの思想に貫かれてゐる。發生的に見て、釋教が成道せられてより以來の二千五百年に渉る佛教の發展は、實に空の思想の發展であると言はねばならぬ。

釋尊在世の頃や小乗部派佛教の頃に、まだ空といふ明瞭な言葉や思想は出来てゐなかつたとされてゐる。概念的に空が成立してゐなくとも、これに代る無自性とか無我とかいふ言葉や思想があつて、これが後に空の世界觀として發達するやうになるのである。

空の思想は總に佛教を貫く根本信念であるばかりではなく、それはまた、横に佛教を結ぶ紐帶でもある。現實としては佛教は地域的に、風土的に、民族的に種々雑多な相貌を呈して現れてゐるが、これらの部派や宗派に共通な思想は、空のそれである。佛教は色々な

理由から多岐多端に分派してゐるが、空の思想を基礎として、それに裏づけられて、更にそれぞれの分派としての特色を持つことになつた。空に裏づけられてといふのは、最も適切な言ひ方である。裏面的には（即ち佛教の言葉で言ふと遮遣的には）空に裏づけられて、表面的には（即ち表德的には）それぞれの分派特有の積極的な主張をなすものである。それ故、多岐に分派してゐる諸派を時、處、人の區別を撤して一つに固く結ぶものを求めるとすれば、それはこの根本思想でなければならぬ。

この裏と表との關係は、もつと適切に言へば、空に徹するからこそ、その空に即して、單なる空に終らざるものを把へることができるとも言へよう。一枚の紙の裏と表の如く、いやそれよりもつと緊密に、裏あるが故に表があるが如く、裏がそのまま表であるが如く、否定に裏づけられて肯定があることは、空の本質に屬することである。

印度・支那・日本三國の佛教の傳承を見ると、空は印度では思想概念として取扱はれることが多く、支那では體驗、信仰として受取られ、わが國では生活として實踐に生かされてゐる。印度の空觀は學問として發達し、支那ではそれが禪門に於いてのやうに、煩瑣な概念的遊戲から脱して、宗教として生かされ、わが國ではそれはただに宗教として體得されたばかりでなく、その上に藝術にまで發展して、日常生活のあらゆる層と面とへ浸み透るやうになつた。勿論

これは類型的な言ひ方で、類型化の便宜上、著しい特色だけを取つてかやうな分類をしたので、これを何處へでも當て嵌めようとするわけではないが、一つの見方として興味が無いであらうか。

× × ×

空は無とか無我とか無自性とかいふ同じやうな否定的な意味を持つた言葉と比べられる。それならば空とそれらとはどんな相違があるであらうか。近頃は「無」といふことが特に東洋的な、また日本的な主題であるかのやうに、諸方面で言はれてゐるが、無と空とは異なるものであらうか。無といふ文字だけを切り離して、これで重要な思想を表さうとしたことは、寧ろ後世のことで、支那では禪門が興隆して、無心とか無念とかが禪の要諦とせられたり、趙州の無字の公案が喧し言はれたりしたとことと關聯して、空に代る概念となつたので、空と無に區別を置く必要はなからう。最近諸方面に涉つて日本の性格が反省されるやうになつて、無の藝術、無の哲學などといふ言葉が、一層繁く使はれてゐるやうである。私は無と空とを同じ事柄として取扱ふことにして、空の持つ内容は無にもまたそのまま屬してゐるものとして話をすすめることにする。

次に空と無我とはどう違ふか。これもまた同じ意味に外ならないが、無我が諸法無我などと熟して古く使はれたのに對して、空は一切皆空などと用ひられて後世になつて使はれたのである。無我といふこと、この私の實體とかあの人の實體とかを否定することに限ら

れてゐるやうに思はれて、人間に常住不變の自我があることを否定する思想に限られるやうに思はれるが、それは無我の一面、すなはち人無我とか補陀伽羅無我とか呼ぶ方面であつて、無我はこれのみに終るものではない。他の一面に、凡ての物や事は因縁によつて生じたもので、實我、實體があるわけではないと見る部面、すなはち法無我が備はらなければならない。人にも物にも實體はない、凡ては因縁の上に生れ出でた關係に外ならないと見るとき、人無我と法無我とが完うされて無我觀が完成し、空と全く等しいことになる。諸法無我は、かうして一切皆空になる。經典にはかういふ空を大空などと名けてゐる所もある。

かう述べてくれば、何人も氣づくであらうやうに、無我は空への發展の道程にあると言へる。無我が人とか物とか事とかを分けて分析的・思惟的に諸法の實相を把へてゆくの比べると、空は綜合的に直觀的にこれを味得するのである。無我にはまた論理的・概念的な特徴が多いが、空になると體驗的・氣分的になる。無我と空とは一應かうした區別が考へられると思ふ。

無自性もしばしば空と比べられるが、これらは空ほどに包括的ではなく、無我や空を説明する一つの理由に過ぎない。諸法は自性なきが故に空なり(大智度論)など言はれる。それ自らの存在自性が無いといふことは、更にその理由として、諸法が因縁生であることを豫想してゐる。凡ての存在は因縁より生ずる、即ち因縁が和合

して生ずるのであるから、それ自らの存在、自性は無い。ここで三つの説明が順々に次へと送られてゆく。凡ての物や事は因と縁とから生じたものであるから自らの存在は無い。自らの存在がないから空である。因縁生——無自性——空。

× × ×

空を明かにするのに因縁生といふ説明が用ひられてゐる。空の一つの理由は諸法が因縁より生じてゐるといふ所にある。説明の便宜上分析して、因縁生なるが故に無自性、無自性なるが故に空、といふやうに三段の順序を追ふて、別の事柄のやうに説かれるのが、これらは實際に於いては一つ事であつて、空がそのまま因縁生として直観され體解されねばならぬ。空は、ここで、ただの消極的な観方ではなく、それに即して、因縁の和合する所、様々の因や縁の絲の絡み纏れる所に、物や事が生起するといふ諸觀を得るのである。今の言葉で言へば關係である。絲の纏れは暫くの間、結び目が玉をなすけれど、もしこれをほぐせば後には幾條かの絲が残るだけである。物もまたその通りで、諸の因や縁が無數に交錯し交流する所に存在とか事實とか呼ばれるものが生起する。勿論、因縁は無數であつて、どの因、どの縁が如何なる果を生ずるかは、容易に判斷することができない。人間の知識では判斷することができないので、その限りに於いて、人間の知識は不確定的である。然し刹那々に無數の關係が流動し交錯して、物や事を生起させてゐる。それは關係と

いふ言葉さへ、何か實體的なものの相互の間の關係を聯想し勝ちであるから、餘り適當とは言へないほどの、關係であり力の流動である生起する物や事はこの流動の中で生起する空を外國語に翻譯するのに、虚無とか無とかいふ語を當てるのは普通であるが、或る學者がこれを相關性と譯したのは、空のやや積極的な一面を把へたもので、空の因縁生といふ方面をよく理解したものである。

空がかういふ内容を持つことが解れば、それを手掛りとして、一層豊かな内容の直観へ進むことは、困難ではないであらう。(未完)

中村 辨康 著

日常勤行式講讃

B6版二百四十頁 價一圓五十錢 送料十二錢
信仰の入門書、信仰の深底を明示せる必携の修養書！

文學博士 山本 幹夫 著

法然佛教とわが國體思想

A5版クロス装 價二圓二十錢 送料十五錢
神國日本の教法として開創された法然佛教を解明す

發行所

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番



樂^{たの}しい花^{はな}祭^{まつ}り

東京聯合花まつり會代表

安藤 嶺 丸

灌佛會と花まつり

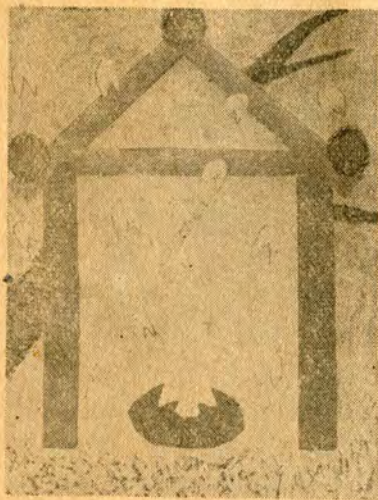
「花まつり」とは、四月八日の釋尊降誕をお祝ひするおまつりである。古くは灌佛會

とか佛生會などと云つて、寺に村に、随分廣く行はれたものであるが、その紀元は實に古いもので、記録によれば、推古天皇十四年に、大和の元興寺で行はれたと云ふことである。

此の古い歴史を持つ灌佛會が、「花まつり」と呼ばれて、日本全土は勿論のこと、更に國際的な大衆運動にまで發展したことは、單に形式的な名稱の變化のみでなく、從來は一部の寺院や、篤信者によつてのみ行はれたものが、汎く一般有縁の大衆ごとくが之れに参加し、隨喜すると云

ふ點に、大きな意義を持つものである。花まつりが斯くの如く大衆的な國民行事となるには種々な原因もあつたと思ふが、その中で忘れられることの出来ないのは、「歌謠」が澤山作られたと云ふことである。先づその初期に於ては

むかしも昔三千年
花咲き匂ふ春八日
ひときわたつた一と聲は
天にも地にも我れ獨り
と云ふ赤尾白鑽氏のそれである。これは實によく普及されたものであつて、殆んど津々浦々で唄はれてゐるものである。三十餘年來唄はれてゐる、生命の長い歌である。其後「甘茶踊り」であるとか、「花まつり讃





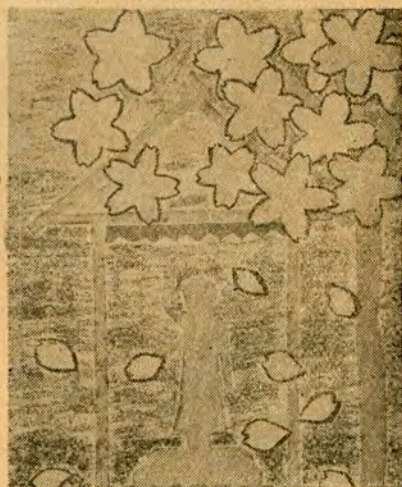
歌^{うた}等々實に七十餘種^{よそよそ}の多きを數^{かず}ふるのであるが、しかし未だに千供達^{ちんくたつ}に親^{した}しまれ、口づさまれてゐるのは「むかしも昔^{むかし}」の歌である。これは昨年^{さくねん}コロンビヤ艦^{かん}に吹込^{ふきこ}まれたのであるが、今後幾千萬^{いくせんまん}の子供達^{こどもたち}を喜ばせることか、思^{おも}ふだに嬉^{うれ}しいことである。

學校の花まつり

斯^{かく}様に歌によつて發展普及^{はつじん}された花まつりも、一昨年^{いっさくねん}の國民學校^{こくみんがっこう}の新教科書^{しんがくしょ}中、よみかた卷三^{まきさん}(二年用)の開卷^{かいがん}第一に「花まつり」なる一課^{いっか}が載^のせられたことによつて、いよく拍車^{はくしゃ}がかけられたやうな觀^{かん}があるのである。しかもこれはまことに可愛^{かわい}らしい童謡^{どうたう}である。

すみれ たんぽぽ れんげ草^{れんげぐさ}
花のおやねが 美しい

あまちやの中^{うち}からひよつこりと
お出^{いで}になつたか おしやかさま



天上^{てんじやう} 天下^{てんか}を ゆびさして
お立ちになつて ゐらつしやる
小さな ひしゃくで お茶^{ちや}くんで
かけてあげましよ おしやかさま

てふも 小鳥^{ことり}も たのしさう
今日は あなたの 花まつり

とは、いかにも楽しい「花まつり」ではないか。此^この歌は早速東京音樂學校^{とうきやうがくがっこう}教授^{けうがう}の下總院^{しもすゐん}一氏^{いちし}に作曲^{さくしやく}をしてもらひ、これを文

(一爲田半 生年二校學民國堀新)

部省^{ふくしやう}檢定^{けんてい}として全國^{ぜんこく}の國民學校^{こくみんがっこう}に頒布^{はんぷ}して、廣く朗かに、この「花まつり」を子供達^{こどもたち}に歌つてもらつてゐるのである。

實^{じつ}は學校^{がっこう}で、授業^{じゆぎやう}中に「花まつり」を實際^{じしぜん}に行つてみてもらひたいと云ふ學校當局^{がっこうたうきやう}の希望^{きやうばう}によつて、二十數校^{にじふすうがっこう}で催^{もよほ}してみたのであるが、どの學校^{がっこう}でも始めてのことではあり、先生^{せんせい}も子供達^{こどもたち}も珍らしい行事^{ぎんじ}なので、大變^{たいへん}に喜んで呉れたのであるが、とりわけ私共^{わたくしども}の喜んだことは、じやぶくんと甘茶^{かんちや}をかけさせると、どの子も申合せたやうに、「にこり」と微笑^{びせう}して、ちよこんと一體^{いったい}することである。この一人々々が、たつた一杯^{いっぱい}でも甘茶^{かんちや}をお饗^{かう}迎^{むか}さまにかけたと云ふことが、どんなに良い佛種^{ぶつしゆ}を童心^{どうしん}に植^うえることとなるか、と考ふる時、少々位時間^{じかん}はかかつて、各自^{各自}にこの灌佛^{くわんぶつ}(甘茶^{かんちや}をかけること)をさせることは、どうしても忘れてはならぬことだと氣付^{きづ}かせられたことである。

此^この學校^{がっこう}に於ける「花まつり」が、子供

達にどんな驚きを与へたかは、次の作文でも知られるのである。

新堀國民學校二年 田中デン吉

今日は花まつりの日です。ぼくは早くあま茶をかけたと思います。その時りんがなりました。みんながならんでから、校長先生がお花をあげ、古屋先生がおきやうをよみました。それからくろいめがねをかけた先生が、お話をしてくれました。

それから二年生の先生があま茶をかけ、ぼくたちがあま茶をかけました。そうしてからほかの先生が「天上天下をゆびさして」とお話しになりました。みぎの手が、よくべんきやうするのです。ひだりの手が、りつばなはたらきをすることです。とおつしやいました。うれしい花まつりは、それでおはりでした。

花 ぶ る 淨 土

お釋迦さまは百花咲き爛れる、陽春四月

八日に、ルンビニーの花園でお生れになったのであるから、花まつりと云ふ名稱にふさわしい、明るい清らかな行事となるのは當然であつて、年々歳々、あの美しい日比谷公園で開かれる「花まつり大会」の如きは、實

にその名にふさわしいのである。大無量壽經の重寶



偶には (新堀國民學校二年生 安齋一郎)

「當雨珍妙華」とあるごとく、此の國土を花降る淨土たらしむるは、佛教の大理想である。また阿彌陀經には「晝夜六時、而雨曼陀羅華」と説かせられるごとく、晝夜に美しい曼陀羅華を雨ふらすことが、此の國土を花の淨土たらしめることである。お釋

迦さまが此の世に御出現遊はされたと云ふことは、泥中に美しく咲き出づる白蓮華の如きものである。實にそれは真理の華を開き發されたことである。此の偉大なるお釋迦さまの御理想はやがて一代の説法である華嚴となり、法華と開かれてこの迷へる人生をも、やがては花ぶる淨土たらしめんとされたのであつて、この大いなる理想の開顯者であるお釋迦さまの御降誕を喜び合ふのが「花まつり」である。時あだかも四月上旬である。櫻花爛漫たる花のトンネルの中で、美々しく花で飾られた花御堂を中心として、甘茶をかけたり、拜んだりしてゐる圖はいいものである。印度語の權威であられる花井直攀博士が、中央商業の校長となられてから、此の「花まつり」を盛んに行はれてゐるが、先生は全生徒に、



一本づつ花を持参させ、この花で花御堂の屋根を葺き、更にその周囲を花でうづめるのであるが、なにしろ二千餘名の生徒が持つて来ることで、一大花園が展開されて、實に美事な花まつりであると語られるが、想像しただけでも清々しいことである。



動物園の花まつり

花まつりは、お釋迦さまの理想であるところの、此の國土を「花の淨土」たらしめる國民行事であると共に、更に「一切衆生悉有佛性」と説かれた、高い理想に生きたる國民行事である。従つて年々上野動物園に於ても、盛大なる「花まつり」が行はれるのである。

これには動物を代表して「花子象」がノツシ／＼と参拜するのが呼びものになつてゐるのである。可愛いもので、佛前ではちゃんと脚を折り頭を下げ、恭しく禮拜するのである。いかにもよく訓練されたものである。この象君は七年前に、當時のシャム國から寄贈されたトシキと云ふ象で、その頃は七百貫位の小象であつたので、花まつりは美しい着物と冠とを贈つたのであるが、なんと數年後の今日では、それが小さくなつて仕方ないと云ふので、二十六反餘の

布地を費して、大きな着物と冠とを再び贈つたのである。

此の動物園の花まつりは、とても賑やかなものである。數萬の人の波である。しかもその会場は、時しも満開の櫻が、ひらひらと舞ひ舞ふのである。花まつりにふさわしい風景である。

甘露の法雨

斯様に「花まつり」は、内に外に、子供に親達に、親しまれ喜ばれて行はれてゐるのであるが、その結實は大きいのである。

と云ふのは、昨年、教科書のよみかた巻三に「花まつり」が載せられ、而も國寶の誕生佛まで挿入されてゐたので、一日文部省の編集官の方々にお集りを願ひ、「花まつり」を中心話題としての研究會を開いたのであるが、席上一編集官が云はれるのに、

「私は佛教の事は餘り知らない。また佛教的信仰も別段に持つてゐるわけでもないが、幼い頃に、あの甘露をお釋迦さま

會のたより

◇非常時局下に於て御誌を通じて必勝の信念を固める教養を興へられつゝある事を嬉しく思ひます。今後とも宜しく御指導をたまはりたく存じます。(伊丹市東洋リノリニウム株式會社内、小玉亮藏)

◇「淨土」に御執筆の諸先生に厚く御禮申し上げます。何も知らず唯有難く嬉しく存じてゐます。辛い時も悲しい時も嬉しい時も「淨土」を開いて、何處でもよろしく眺めてゐますと薄紙をはがすやう胸が開け有難く、ただながることの出来る喜びでござゐます。眞野先生お寒う御座ゐます。お身體御大切に國のため私どものため一層御自愛下され、御導き下さいませ。愚かな女が神戸のはしより眞野先生の御多幸、御健勝を祈りをります。(神戸市林田區寺池町中本千代)

◇小生こと昭和十四年八月二十四日ノモンハシ戦場に於て長男を捧げ軍人授護會より譽の家

の御贈與を受け、又「淨土」を毎月楽しみに拜讀致しをります。會のたより」に陸軍大臣閣下より更に三回の感謝狀を拜しこれまでに四十一通に及ぶとのことあり、貴會の榮譽は申すに及ばず會員の吾々まで嬉しく思ひをり、何卒將來益々御奮勵被下度、甚だ些少なながら同封小爲替を慰問淨土の費用に御充當被下ば幸甚に存じます。(佐賀縣伊萬里町木須岡島喜代治)

◇當地別院の婦人會より各會員へ「淨土」を配附いたしてゐますが、皆様より大變に喜ばれ、中には御主人様まで次號の到着を待ち下さる等の由にて誠によき事をさせて戴き、幹部一同も喜びをります。天津、森川錦子、貴會員の一人にして戴き今日まで色々人間として、又私共若き迷ひ易い時代のものとしてどんなにか力強く指導して頂いたか感謝の外ありません。今月より友人一人を會員に加へて頂きたいと存じます。又同封の金は傷病兵慰問淨土の寄附にして頂きます。(東京府傷病軍人療養所、島木稻恵)

にかけたことだけは、どうしても忘れられない。そんなことがこの花まつりに、いさゝかでも關心を持つこととなつたらしい。

と云ふのである。幼い頃の思ひ出として、なつかしくもあり、床しいことである。花まつりとは甘茶をかけることであるとうけとる。それでいいのだ。たつた一度でも、お輝遊さまに「うぶ湯」の甘茶をかけることによつて、甘露の法雨に浴する因縁となるのである。

今や大東亞戦争の眞つ只中にあたりて、ひとびとの心は、いやが上にも、いらだちすさみがちである。こんな事ではいけない。脚下を照顧せよ。動亂の世相なればこそ、寂然不動の信念を養ふことこそ、緊要であるのである。

此の意味に於ても、此の際こそ、尙は一層花まつり運動を盛大に行ふべきであると信ずるものである。

歌壇

岩野喜久代選



北海道 永尾 慶吉

廻航する揚子江岸のどやかに舟曳
く民手を振りけり
評 洋々たる大江の春廻江する民
船を岸から曳く苦力たちが船に
ある人達を見て手をふつたと云
ふのどかなうら／＼した情景が
歌ひ出されてゐる

満洲國 鶴岡 慈禮

夕暮れの霞ひきたる氷原に浮き出
てて見ゆ城壁の門
評 北満の水原にも春が来て、霞
がたなびくやうになつた。併し
大地はあくまで凍てついて寒い
その夕霞の中に城壁の門が高々
と聳えてゐるのを見て作者はハ
ツと胸ををどらせたのである

和歌山縣 奥村 映水

紀の國やバスは柑子の中を行き光
る木の實のうち續きたる
評 山も平地もみかんで蔽はれた
紀州の暖い海岸地方が先づ眼に
浮ぶ、つづらな實の累累と生つ
てゐる中をバスで通ふ作者の心
もゆたかに楽しいことであらう

東京 清水 富

はろばろと麥の芽萌ゆるはたてよ
り大き初日のをどり出でたる
評 北満の凍に恐れじ兵等われ零下三
十度の野に臥し護る
大坂市 吉岡 光雄

溢れ出るこの汗を見よ生甲斐の極
みと云ひぬ若き土工は
兵庫縣 水谷 良子

野の面に降りつむ雪や北海に在る
子を偲び憂仕事事も
群馬縣 松本 時雨
弓を射し人の心は放ちたる矢音の
ごとく澄みさゆるらし
栃木縣 大輪 清

梅の花よはひ重ねて捨てがたし香
の高きまま近づきて見る
静岡縣 一向 山人

富士の嶺は雪に光りて尊かり聖戰
必勝の姿なるかな

京都市 葉山 千高

あな清し米英撃つと國も年のは
じめに戦さ宣らしぬ
群 一星野 芳雄

有難し老いたる母の衰へを見せず
ひたすら孫を見たまふ
名古屋 鷺津 耕順

きさらぎの冷え思はする亡き母の
きびしき訓へに今應へなむ
兵庫縣 前川 泰衆

過ちし友にかはりて罵られ耐へる
前に菊花ましろき
大坂市 萬 順雄

國こそぞる大事の前に益良夫は醜の
みたてとわらひてぞ散る
兵庫縣 矢場佐太郎

みんなみの戦友からの初便り「あ
とを頼む」とただに一言
岩手縣 中村 てつ

寒行に御坊のみあし凍るらん吹雪
に鈴の音も絶え絶え
三重縣 青木 柱山

シンガポール陥落一週年
を迎へて
砲煙のちりはらわれて昭南のみな
と静かに朝日輝く
東京市 小柳 萬

逆落し突込み自爆す海鷲の大和魂

に敵も哭きけり

北海道 茂木 道雄

この日より作業につきしよろこび
を故郷の母に文もつづけぬ
大分縣 梅田 徳禮

寒寺に鐘の音聞かんと往き見れば
人なき堂の荒れし化し
北海道 花田 順往

われ老いていくさの庭にたたれね
ば孫子をやりて武運祈りぬ
兵庫縣 山本多可子

行きずりによく似る人を見てしか
ば幾度か見ぬ振りかへり見ぬ
愛知縣 養所 戸松 勝美

冬の日の光り嬉しむ退所する友と
静かに山道あゆむ
大阪府 三木 繁雄

若人の意氣と氣魄の寒穉古塵高々
に竹刀ふるかな

投稿規定

はがきに一四二首以内
とし、一稿一題、一稿一題
と題ありて住所氏名明記
の上送ること

篤志寄附者芳名

金四圓也

北海道利尻郡本泊村

慈教寺 島中明導殿



聖典
講義

今ぞ意味ある

「地獄の繪」

大野 法道

歎佛偈講義……一……

—

譬へば恒沙の如き諸佛の世界

また計るべからざる無數の刹土あつて

光明悉く照してこの諸國に徧く

是の如く精進にして威神量り難からんに

之は第十三・十四偈である。これより第十七偈までの五

偈は、佛の住みたまへる世界の淨土について、法藏菩薩が

その信念と希願するところを述べられるのである。その中

この二偈は、まづ一般に淨土とはいかなるものであるかを

明らかにするのである。

それについて肝心なことは、人々の住む國、世界をよく眺めてみる必要がある。

人々の住む世界は、大體三段に分けて見ることができ
る。その第一は誰の眼にもすぐ見えるもので、世界の國々
である。各國民は何れも、それ／＼の國籍を持つて自分の
國の領土に住んでゐる。ところが大使公使や外交官など
で、外國に居住する人は、自分の國に住んでゐないではな
いかといふ問題がある。大使や公使ばかりではない。すべ
て海外に行つてゐる人達も同様である。そこで人の住む世
界について、第二段に話を進めねばならぬ。

使命や職務を外國に持つて、あちらへ行つてゐる人は、
たゞ住所が外國にあるだけで、住んでゐる世界は、本國に
在る時と何等異なるところはない。之を日本人について言へ
ば、尊嚴無比なる國體を奉戴し、日本人としての使命に邁
進することは、どこへ行つても變らないからである。

こゝで知るべきことは、人の住む世界の第二段は、その本國の中に在るのは勿論だが、たゞそれだけではなく、國の外にもあるので、つまり、その人の身に即いてゐるといふことである。

二

人の身に即いてゐる世界をよく見ると、さらに第三段として見るべき世界がある。それは人々が實生活によつて、各自のものを造り出して、その中に住んでゐる世界である。早い話が、こゝに或る人があつて、善くない心を持ち、後ろ暗い生活をしてゐるとしたら、その人が如何なる世界に住んでゐるか、またその反對に、公明正大なる生活をしてゐる人が、いかにあるかを考へる時、すぐに陰氣で碌に光も射さず、あちこちに落し穴の開いてゐる世界と、廣々とした明るい世界とを見ることができるとであらう。

そのやうに、人々の生活から生み出すものとして、窮屈な世界、無理に無理をして何時壊れるか判らぬあぶない世界、張り切つて力の満ちてゐる世界、生きてゐて伸びてゆく世界など、限りなく異つたものゝあることが判るであらう。

已上、三段に分けて、人の住む世界の情勢を眺めたのであるが、實際にはこの三つが互に交錯して、一つの世界になつてゐる。

世界を三段に分けてみて、しかもそれが一つになつてゐるとすれば、いかに第三段の生活から造りだす世界が、大切であるかに氣の付かぬ人はないであらう。それは個人の満足からではなく、尊い國體を奉戴することに徹するためには、わが身の造りだす世界が、皇國の尊さに相應しないやうなものであつてはならないからである。

この第十三・十四偈は、これらのことを心得て居れば、雜作もなくわかるであらう。

つまり人々の造り出す世界には、明闇、廣狹、安危から弛緩、嚴肅、さては虛妄、眞實など、無數に異つたものがある。その中で明るく廣く眞實で、生きてゐる世界の極度が佛の住む世界淨土である。「恒沙の如く……無數の利土(國、世界)あつて、光明悉く照して」とは、佛の世界が闇黒を去つた明るい處なるを告げるのであり、その他廣々とした裕かさがあり、嚴そかに生きてゐることなどを、すべて含めて「威神量りがたし」といふのである。是の如く精進にして」とは、第十二偈の「正道を求めて堅正

にして卻かざる」精進の生活によつてかゝる世界が出たことである。

つまり淨土は、いつとはなしに天から降つたものでもなく、知らぬ間に地から湧いたものでもなく、實に人間の正道に精進するつとめの果に、完遂し成就したものなのである。この淨土に、他の宗教が始めから、天國とか極樂とかを定めてかゝるのとは違ふ、佛教の特色がよく顯はれてゐる。

三

人々が造り出す世界の、美はしい極度が淨土であるが、その反對は恐ろしい世界である。

恐ろしい世界について思ひだすのは、「地獄の繪」である。この繪を見ると、大きい金棒を振り上げて、追つかけて来る鬼に追はれつゝ、人間が針の山、劍の林を逃げまはつてゐる所や、大きな蛆の上に人間を裸で仰向けに寝かせその下腹あたりを、大鋸で挽き切つてゐる所や、大勢の人間を大きい釜で、一所くたに煮てゐる所などが描いてある。

むかし江戸時代に國學が盛んになつて、佛教に批評の眼が向けられた時、まづ先に取り上げられたのは此繪であ

つた。そして、悪いことをすると、死んでからこのやうな目に合ふ、と説くのが佛教であるが、こんな事は何處へ行つたとて有りはしない。無いものを有ると言ふのは嘘である。うその教へなど信ずるに足らぬと、佛教排撃のよき資料にされたのである。

その後この繪は、世間から見向きもされず、今では心ある人は別として、一般には美術品としての價值だけしか認められてゐないやうである。

然るに今や、この繪がものを言ふやうになつた。

支那事變このかた、すべてが新體制となり、大東亞戦争となつては、あらゆる方面に統制を見ることがなつたが、永い間の自由時代の夢から醒めきれず、少い物資に窮屈を感じ、何とかして窮屈から逃れ出やうと、血眼になつてゐる人があるとしたら、この繪が何と見えるであらう。かうした人の生活が生み出す世界には、到る處に刺々しい針や劍が立ち並んで居り、一にも窮屈、二にも窮屈と、窮屈で一ぱいになつてゐる生活態度を改めて、配給の物に足るところを知らぬ限りは、窮屈の鬼はどこまでも追つてくるのである。

して見れば、かうした人の住む世界を繪に描くことゝな

れば「地獄の繪」に見る針の山より、外に描きやうはないであらう。

また、腸が腐つてゐるために、戦争生活がしつかり吞み込めないとしたら、下腹を切開して、腸の入れ替へをする必要があり、熱心さが足らぬとしたら、大金にたぎつてゐる熱湯に入浴させて、身體の心から熱くしなければならぬ。

之は有る無いの問題ではなく、この決戦下に、かゝる反省は不斷に必要であり、まさにこの繪の如くあつて然るべきで、何人と雖、之に異議のあらう筈はない。さすがに古聖の描かれた繪である。一旦は見捨てられたやうでも、時が来ればこのやうに、戦争生活の正道を履みはづして、恐ろしい世界に落ちてはならぬと、時局下、最も意味あるものを言ふやうになる。

貯金しませう

宗教團體戰時中央委員會

大東亞戦争を最後まで勝ち抜くためには、精神力と経済力、この二大要素こそ大切であつて、我等銃後にあるものの瞬時も忽せに出

るのであります。大東亞戦争も今や緊迫した對峙の裡に最後の勝利をこれにより決しよう、我も彼も必死になつてゐます。一瞬の油斷も禁物であります。國民貯蓄の増強が要請せられ、朝野をあげて完遂に邁進してゐるのも全く我が経済力をして皇軍の大戦果に裏づけしめんとするが故であります。

來ないものであります。物が足りなければその轉用と節約によつて賄つてゆかねばならぬし、二百七十億といふ龐大な國民貯蓄も國民の「よしやるぞ」といふ心意氣によつて否が應でも積み上げて行かねばならぬのが今の経済なのであります。赫々たる戦勝の背後には必ず充實した経済力がこれを裏づけてゐる。

貯蓄の方法には積立貯金、定額貯金、彈丸切手を初め通常貯金、規約貯金、集團貯金、据置貯金等があり、これらの貯金が國債を買入れたら、その他時局下重要ないろいろな働きをしてゐるわけであります。

一口に二百七十億圓といつても、實際に目

の前にこれだけの金額を十圓札で列べてみたら何んなことになるでせう。

もし十圓札を縦に二百七十億圓だけ列べると日本列島の長さ(五千軒)を四十三倍につなぎ合せたよりもまだ三千軒も長く續きます。又横にして十圓札を列べると地球の周圍を九回半もグルグルまいてしまふことが出来ます。もし十圓札を高く積みあげると二百七十億圓で富士山の高さ(三軒七の五十四倍)よりも二軒半も高くなります。又これだけの十圓札を貨車で運ぶには十五疋貨車にぎつちり積み込んで運ぶとして、實に百四十四輛を要することゝなります。



洋傘屋が
考へました
落下傘部隊
だアー



御隠居さんの
貯金熱



庭は全部貯金玉の恰好に
刈込みました

客の災難



// 班長たるもの
後れては一大事 //

はから
ずも
訓練警
報發令
さる



熱いの
寒いのと
南北の兵隊さ
んを想へッ

お目出度
〃オヤ奥さんは二
人分ですネ ま
けときましょ



恐れ
〃先生は大
變な熱だ
ぜ
貴君から
先に指南
してもらへヨッ





擔當 中村 辨康

(質問)

佛教は外來教か

(問)

お宮で「佛教を信ずると日本は滅びる。印度は南方の小國の如し」と云ふ講話がありました。是は小乗教を目しての誤解であらうと思ひます。日本のは大乘佛教、特に上陛下が御尊信遊ばされた皇道でありますから、かゝる説は妄説と思ひますか。

私は印度や南方等の共榮園は日本佛教を以てこそ更生さすべきだと存じますが如何でせうか。

近來佛教を邪教視する傾向があるやうですが、それは佛教を外來教と思つて居るからだと存じます。依つて佛教と皇室、佛教と神惟

大乗教、小乗教、皇道佛教の特異點をお教へ下さい。

(答)

之道、佛教と日本精神、皇道佛教等について淨土誌上で詳細示教あらんことを切望して止みません(福井・坂井・新保・淨土子)

やうな、そんなつまらない日本で佛教を信じたからと云つて滅びる

せうか。そんなことを云ふ人こそ本當に知らない人ではないかと思ひます。何にも知らない癖に「八紘爲宇」の廣い氣持に反した排他的な偏狹な自分のつまらなさを知らない小人物の言つたことを一々取り上げて居ては實際がありませんから、そんなものは捨ておかれるのがよろしいでせう。

仰せの通り御歴代の天皇が御尊信遊ばしたからこそ下々のものがこれに見做つて佛教を信じたのであり、皇室の御育があつて初め

て印度や支那に見ることの出来ない發達をしたのですから、日本教であつて外來教ではないのです。奈良佛教は外來でしたけれども、それ以後のものは外來の形を取つた天台宗眞言宗及び臨濟宗曹洞宗などの宗旨も「日本の性格」を多分に持つて居て、支那のそれとは全然異つて居るのですし、淨土宗眞宗融通念佛宗日蓮宗時宗などは支那からの傳承でなく日本で出來た宗旨であります。その端緒は法然上人が開いたのであります。何れも皇道に則り天業翼賛につとめて居るのであります。此の點に至ると教派神道は何れも御皇室の御尊信がなく、僅かに天祖及び神代の神々をお祭して居ることに依つて多少連絡があるだけであります。

また御説の通り南方共榮園中、取りあへず佛印、泰、ビルマ、セイロン、東印度等の地域へは佛教の因縁を以て日本佛教を持つて行つた方が、彼等を向上せしむるたよりにもなるかと思ひます。

次に大乘教とは大きいのりものと字が示め

すやうに、一切をのせる教であります。但し乗せるとは何でせうか。凡てが明るく生きることでもあります。共に生きて行けるもの、共同して榮えて行けるもの、共に共に覺醒し合つて行けるもの、共に生きて行けるもの、

また小乗教とは本當に生きることを云ふことを忘れて小さな枝葉末節に捉はれて居るもの、ことで、名は大乗佛教と云つても事實上小乗教に墮して居るのは小乗の大乗教と云はるべきものであります。

次に皇道佛教は何の宗旨でも今流行のやうにそれを言つて居りますが、成る程御皇室の御育てに依つたのですからその點から言へば皆な皇道に依るものでせう。然し中には護國教的立場を取つて居る宗旨もありますから



護國教的立場に立つ宗旨はむしろ皇道佛教と言ふよりも、護國佛教と名のるべきであります。私は法然上

人の淨土教こそはその國體觀念を明徴にする點に於いて最も純粹の皇道佛教だと思つて居ります。

佛教と皇室、佛教と推神道、佛教と日本精神のことは「皇道佛教」が明らかにれば説明されなくとも明瞭になるものと思ひます。

之れに對しては辻善之助博士「日本文化と佛教」鷲尾順敬博士「皇室と佛教」椎尾辨國博士「法然と日本文化」山本幹夫博士「法然

修證義のやうな有難いお經を

(問) 私は淨土宗であります、この度禪宗の法要へ参りましたところ、

修證義と云ふお經をきゝまして實に有難感心致しました。淨土宗には阿彌陀經の外に何かお經はありませんか。來迎和讃などをお經のやうに讀んだら如何でせうか。(北海道・渡

島・一信徒)

(答)

曹洞宗の檀信徒おつとめの「修證義」は明治三十三年十二月一日付で曹洞一宗に宣布されましたが、それは道

佛教とわが國體思想、椎尾博士「日本佛教の新使命」等を御覽願ひたいと存じます。また廣告されませんが最近(多分四月か五月頃)發賣される拙著「法然上人の宗教」なども御參考にならうかと存じます。

また淨土誌上ではまゝと云ふ譯には行きますまいが、機會あるごとにそれらの問題に觸れつゝあるものであり、また今後それらに觸れつゝ進みたいと思つて居ります。

元禪師の正法眼藏の中から選り抜いたものです。五章三十一節三千七百四字から出來上がつて居ります。第一章は生死をあきらむるは佛家の一大事因縁なることを明かし、第二章は懺悔滅罪、第三章は受戒とその自覺、第四章は發願利生、第五章は行持報恩を説いて居ります。その中心は第三章の受戒で「禪戒一如」の見地に立ち特に坐禪を強調しないところに平生生活の意義深いことを教示して居るのであります。言はゞこれは信徒の心得であ



りまして毎日この
五章三十一節を讀
むことに依つて道
義的な宗意安心を
得ると云ふことが
制定のねらいどこ

ろなのであります。ですからお經のやうに唯
だ有りがたがつて讀んで居るだけでは意味を
なしません。淨土宗で言ふと「一枚起請文」
とか「一紙小消息」とか云ふものに比敵する
もので、それに依つて宗意安心を固めなけれ
ばならないのであります。

修證義がよくわかるのは畢竟假名書きだか
らであります。また阿彌陀經は餘程信仰が進
まない、逆に何となく「浅い」と云ふ感じ
を持ち易いものですが、あれを「國土莊嚴章」
「往生淨土章」「諸佛證誠章」「願生難信章」と云
ふやうに區切つて味つて見ますと、それが如
何に現代の日本人に取つて國體觀念を養ふも
のであるか、誠に意義深いものを感じて合掌
恭敬せずには居れないでせう。然しこれは信

仰が進まないといふ充分に分りかねます。
來迎和讃なども無論結構ですが、現代人に

梵鐘と半鐘との由來

(問)

梵鐘を拙寺でも獻納いたしました
が、一體梵鐘や半鐘は何の爲に出
來たものでせうか。そして凡そ何年位前から
有つたのでせうか、御面倒ながら御知らせ下
さいまし。(北海坊)

(答)

梵鐘は元と捷稚と云ふ版木のやう
な鳴らしものの發達したものであ
つて、釋尊時代には木製の板を釣つて集會の
合圖に打ちならしたのが、やがて銅製になり
磐となり鐘となり鐘となつたのであります。
大智度論には「銅の捷稚をうつ」とありま
すから印度にも銅製のもののあつたことが證
明されますが、今は残つて居ないさうです。
銅製の鐘は支那で作られたものであります
然しその起原は明らかではありません。後周時
代から盛んに造られて「時の鐘」として用ひ
られたさうであります。

は如何でせうか。もつと國體觀が明確になら
ぬと理解出来ないかも知れません。

我が國では聖德太子の時に四天王寺に黃鐘

調の鐘を懸けたと傳へられますが、現存して
居りませんから、日本で造つたものか、或は
朝鮮支那あたりから傳來したものかよくわか
りません。現存するもので最も古い國產の鐘
は嵯峨淨金剛院の鐘で、文武天皇二年の造と
云ふことです。古るいところでは支那製や朝
鮮製のものが三十近く傳來して居るさうです
大きさは色々ですが、普通一般には高さ四
五尺、徑が二尺前後であります。知恩院の鐘
は高さ一丈八寸徑九尺厚さ九寸五分重量一萬
八千貫と云ひます。

半鐘は梵鐘の半分即ち高さ二尺徑一尺位の
もので、喚鐘、飯鐘、小鐘などとも云ひます
佛殿にかけるのを殿鐘、僧堂にかけるのを僧
堂鐘、廊下にかけるのを廊鐘などと云つて居
ります。百丈清規などにもその打ち鳴しかた

が出て居ります。これも起原はよくわかりません。

浄土欣求の生活の心況は

(問)

十月號の信仰相談に厭離穢土欣求浄土を目蓮宗などでは非國民的態度云云。それに對して委しいお答を拜讀させて頂き眞にお廣くこまやかにおうつくしく拜見いたしました。私も浄土門の信者にて念佛相續の日暮を、まづしく苦勞の多い身上でありながらもつづけて居ります。苦勞で泣ける涙の中からも此のやるせないかなしみの心の底にも楽しい世界がどこかにあつていつかめぐり逢ふ日のあるやうに存せられ、どんなまづい食事をしてもおいしく御座いますし、や

このやうに梵鐘も人を集める爲に用ひられたもので、別段の理窟のないのが本當です。

(答)

には極樂世界は何處をたづねてもないとの事で御座いますから、五濁惡世の現實の世界をぬけ出して心ばかりが浄土往生してちよろしくとなぐさんで来る様に思はれてなりませんが、他の御方様も念佛遊ばして宿善の開發された方で厭離穢土欣求浄土を此様にとられましてお樂しみになつて居る方も御座いますか。また私の心持はちがつて居りますので御座いませうか。恐入りますが御教示を御願ひ申します。

また眞宗聖典和讃の中に御座います。

「超世の悲願きしより、われらは生死の凡夫かは、有漏の穢心はかはらねど、心は浄土に遊ぶなり」此の意味も伺はして頂き度御願ひ申上げます。(山口安保子)

まことに結構な御心況でございます。さう云ふ御心況の人も他に

ありのこととは存じますが、然し中々に有り難いことで、さう云ふ心況の人は少ないことでありませう。

ご和讃の「有漏の穢心はかはらねど心は浄土に住み遊ぶ」の意味もあなたの御心況に近いものであつて、少くとも如來の本願を信じ念佛にいそしむ人は皆な同じやうな氣持を経験する時代もあるでせうと思ひます。眞宗だから浄土宗だからと分け隔てをしたりしてはならないと思ひます。何うぞ御自愛下さい。

一瀬 直行著

新刊 創作集「心の窓」

B 六判定價一圓四十錢

既刊 創作集「怒りの町」

B 六判定價一圓八十錢

東京市下谷區上野櫻木町二

櫻 木 書 房



銃後 美談 街の先達

横井淳道

「習ふより慣れる」といふ言葉があるが、たしかに早く慣れてしまふことが大きな力となるものである。しかし戦時體制のいろいろな慣れてしまつた今でこそ日常のこと身の廻りのことを何んの不思議もなく固めてゐるやうに思ふが、ここまでくるには矢張り數知れぬかくれた先達たちが身を以て教へ導いてきたからである。勿論聖戦下にわれわれの生活がかくなることは或ひは當然だと考へるかも知れないが、同じここまで来るのにも、早く上手に來るために盡力してくれた人々の勞を忘れてはならぬと思ふ。

昔と較べて今の時代で一番有難いと思ふのは、一億國民が一つ心となつて敵撃滅に敢闘

してゐるといふことである。昔なら各自は勝手氣儘に暮し、何ごとも自分さへ都合がよければそれでよかつた。殊に都會人の生活にあつては隣家に誰があるのかすら知らないといふわけで、幾萬の人が一諸に住んでゐても實際は自分一人で暮す孤獨なものであつた。従つて他人の爲にお役に立つが如きことは凡そ考へる者となかつた。それが今では醬油一つ買ふにも隣組が協力し、萬人が萬人ともよいやうに工夫をしてゐる。一寸外出して電車に乗るにも、先に待つ人があれば誰でもその後に着いて自づと一列になつて待つてゐる。判り切つたことであるに相異なるが、かうしてよい事がすらすら出来るやうになつた事を

有難いことだと思ふ。

×

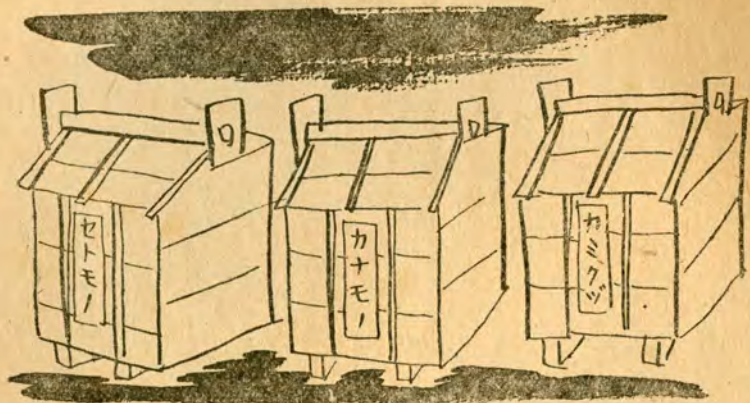
誰でもこれは良いこと悪いことと頭の中で考へたり、口に出していふことだけなら容易いことである。しかし他人のしてないことを自分から進んで行ふことは、仲々努力が要るもので、新しい所に一步踏み出る時に踏み切り臺となるものが必要なのである。若し誰かに一度踏み切つてもらひ、先鞭をつけてもらふとその後はすらすら續いてゆけるものである。百の議論より一つの實行であつて、特に現在のやうに議論してゐる際でない時は、十の實行、百の實行が必要なのである。かういつたわけで何事にも卒先躬行し、他に範を垂れる先達がなくてはうまくゆかぬものである。この先達となる人は誰に頼まれて引受けたわけでなし、又それ相當の報酬が授けられる譯でなくてやる人である。しかもそれでゐて並々ならぬ骨折りと忍耐がなくては出来ないし、更にその上後になつてはと角忘

れられてしまひ勝ちとなることが多い。全く以て縁の下^{えんした}の力持ちなのである。だから先達^{せんたつ}は自ら進んで勞多くして名^なのあがらぬこの役割を買^かつて出なくてはならない。それだけ私達^{わたくし}はかうした先達^{せんたつ}たちに心から敬意と感謝を捧^{たも}げたいのである。しかしほんとは特別の人達^{とくべつなひとたち}にこの役割をまかせておけばよいといふのではなく、微力ながらもあつたけの力を出して銃後の務めをよりよく果してゆかなくてはならない。戦争は前線ばかりでなく銃後は銃後で勝ち抜いてゆかぬことには最後の勝利は得られないのである。

×

私の住む中延町五丁目^{なかつのちやうご}（東京市在野區）に河野喜市郎さんといふ人がゐる。この五丁目には千二百五十人以上の人がゐるのだが、河野さんは町會の厚生部長として街の人達のため日夜骨身を惜しまず働いてゐる眞によき先達なのである。事變始つて以來今に到るまで卒先垂範^{そつせんすはん}ことに當つて努力してきたのであ

る。河野さんは實によくやる、河野さんのおかげだとはよくいふが、それなら一體どんな



偉いところがあるのだと聞かれても一寸返答に困る。これといつて特別なことや珍しいことをしてゐる人でないからである。しかしその内から二、三のことを記してみると、先づ第一に現在東京市の隣組全部が採用してゐる三つのゴミ箱の設置は、實は河野さんの創案によるのである。

即ち東京市中の何處を歩いてみても、ゴミ箱が三つ一落^{しやう}に列んでゐて、その中に捨てる物により金物、襪^{くつ}戸物、紙塵等と區別されてゐる。このゴミ箱は廢品回収に大きな役割をしてゐるわけである。河野さんは以前から七百萬の東京市民から日日用物として取捨^{しよ}てられる莫大^{もくだい}なくず物が、その處理にすら困つて問題となつてゐるのをみて何んとかこれを更生させ得ないものかと考へてみた。それには先づ種々雑多なくず物類が汚い物であるといふ觀念からしてなくさぬといけない。そして次には何んとか處理して金にし、更生させられたらよいわけである。

そこで河野さんは自分の經營する工場が本

所にあるので、その工場に新案のゴミ箱を備へつけてみた。このゴミ箱は三つが一組であり、その一つには燃料になり得るもの、他の二つには金物類の廢品と瀬戸物や灰のやうに何うにもならぬものとを捨てることに決め、先づ捨てる時に品物を區別して夫れ夫れの箱に入れた。またこの三つのゴミ箱に赤、青、黄と三通りの色で塗り一目で判るやう色別し、しかも見るからに美しいゴミ箱とした。そしてやがてゴミ箱が一杯になった時、屑屋を呼んでこれを賣つた。その賣り上げは僅かであつたがそのまゝ陸軍省に獻金したのである。本所の工場に珍しいゴミ箱があるといふ話が次々に傳はつて、この新案廢品回收ゴミ箱は一躍して有名になつた。毎日このゴミ箱を見學に来る人達によつて工場は時ならぬ賑ひを呈してしまつた。その内に新聞に報道され、遠くから團體で見學に来る人もあつた。そしてまたたく間に全市に擴がり、今見るやうに數軒合同の新式ゴミ箱が出来たのである。

×

大東亞戦争が始つて街の鑛脈、金屬の供出運動が旺んになつてきた。その時も河野さんは隣組長として辛先して活躍した。河野さんの家には御即位禮の際御下賜の勅語(昭和三年十一月十日)を謹刻した立派な銅版の額があつた。これは河野さんの結婚式に両親から唯一の記念品として贈られたものである。河野さんはこの額を家寶のつもりで日夜拜してゐたのである。金屬供出運動に動きながら河野さんはこの額を何うしたものか可成り迷つた。しかしお國が要求してゐるのは銅とか鐵とかの金屬類なのである。額はなくなつてもその御勅語は頭の中にしつかり刻み込まれてゐるのである。かう考へて河野さんは結局この額をも供出することにした。だが如何に銅製とはいへ、他のものと一諸に取扱ひたくなないので自分で海軍省にまで持参して獻納した。このことを知つた隣組の人々は勿論、近所の人達までも皆振つて金屬を供出し、優秀

な成績をあげることが出来た。

かういつた一々のことを擧げてゆくとまだ他にも澤山な話がある。河野さんは隣組長は組長として十分活躍することが手近な御奉公であり先づ第一着手だと信じてゐるので、雑多な仕事に精を出して働いた。全く自分をなげ投つて他人のために働いてきたことの一端は昭和十七年十月に河野さんが荏原區長から「優良隣組長」として表彰されたことでもよく判るであらう。河野さんの隣組ではこれまで毎度獻金をしてゐる。この點で町内の人々から獻金隣組の名をもらつてゐる位で、最近の例だけでも次のやうなことがあつた。

×

河野さんの隣組では平常からお互に贈り合つて節約してゐた。特に昨年十二月八日には、この記念日を卜して更に一層「買つたつもあり、費つたつもあり」で諸事節約して貯蓄した。この日の貯蓄に前から貯めた金銭を一つにして九十三圓九十七錢を陸軍省に獻納し



た。また今年の正月は従来の習慣を破つてすべての行事を廢止して、これによつて生じた金を隣組全員が持ち寄つたところ五十九圓四十錢が集つた。そこで正月三日にこの金と、皆が力を合せて集めたニッケル貨二十四圓とを海軍省に獻納をした。

かうした獻金にも矢張り河野さんが卒先してその活模範を示してゐたのである。河野さんには六人の愛兒がある。この愛兒には河野さんの念願たる「邦が和し満ちて清く嘉く睦く」といふことにあやかるべく邦彦、清子、和彦、満彦、嘉子、睦子と名づけられてゐるのだが、この子供たちが正月の行事を止めて獻金した親たちに見做つて、兄弟だけで獻金しようとしたもので、兄弟だけで獻金しようとしたものが正月にお年玉としてもらつた金、最高は十圓から最低は一圓四十錢までをそれ／＼集めて獻金したいと父親に申

し出た。これを聞いた河野さんは何んなに嬉しかつたか判らなかつた。普段からの努力と誠意が一度に顯ひられた感じであつた。區長から表彰された時より、誰からお禮をいはれたことより嬉しくて涙を流さんばかりであつた。そこで早速六人の愛兒を連れて海軍省に出掛け、自分もいくらかの金を加へて一家のお年玉として獻金したのであつた。

今でも河野さんは毎月八日に行ふ防空演習を始めとして何事にも身を以て模範を示し、卒先して活躍してゐる。自分の功績を少しも表に現はさないで黙々として働いてゐる。どんな小さなことでも誠心こめて十分働くことがそのまゝ、お國のためだと信じてゐるので自分の行ひを誇つたりすることなく、あくまでも街の先達の任務を果たすべく精進してゐる。かういつた街の先達は、他にも数多くあるものと思ふ。何をやるにも御國のためである。お互に力を合せて勝ち抜きたいものである。(筆者は司法保護司、方面委員、區會議員、町會長 文責在記者)

俳壇



香たいて春を澄みある日本刀
 名古屋市 江崎 孝融

評 春は臆といふ感じを吾等に
 與へるのであるが、そんな生
 やさしいところは此處では絶對
 に許されない。神聖な日本精
 神のあらはれである日本刀の
 すばたを炳かに我等の前に示
 してくれてゐる。

今治市 三木 光子

戦は厨にもあり初籠

評 戦争は女子のあづかる厨に
 も、強く響いて來てゐる。今
 日ほど男子にも女子にも戦争
 意識を強く植ゑつけたことは
 ないであらふ。初籠の前に立
 つて作者はけなげにも勝ちぬ
 く決心をしてゐることがよく
 窺はれる。

東京 清水金鈴子

おみくじの前にたちけり年の春
 評 善男善女がやつてゐる如く
 自分も亦やつて見やうかしら
 と「おみくじ所」の前に立つ
 た。とそれだけであるが、作
 者の躊躇してゐる氣持が窺は

れて面白い。餘韻を残して表
 現してゐるのも良い。

山口 山本 壺天

默禱のしばしを強く吹雪かな
 京都 拜郷 賢三
 頬赤く山の子供の冬元氣
 廣島市 山口 勇治
 負うて行く稻の穂擦れの相ついて
 紀伊熊野 竹中八洲子

足あとを明かにして田の水
 高岡市 内山 覺阿

海を抱く立山連山寒日和
 満洲 鶴岡 慈禮

身邊の雪に朝日のあたり來る
 岩國市 長岡 白朝

水仙に日の下の風柔かし
 東京 坂口 光雄

乙女子のみな美しや雛の宵
 高知縣 横山 亮圓

何となき心にありぬ御代の春
 愛媛傷療 折出 双生
 日脚のふ机によりて居たりけり

明石市 山本多可子
 霜光る落葉の下の春の草

名古屋市 熊澤 秀國

枯野中山羊の白きは哀しけれ
 別府市 阿部 孤啾

石船の捨石落す春の海
 栃木縣 大輪 清

さ夜更に雨きて蛙鳴きにけり
 青森縣 丸尾 傳山

草萌の原ひろくとなりけり
 東京市 井原しま子

群りて鴈氷の端に浮く
 同 山本 竹泉

冬霞御堂の屋根の反り高く
 兵庫縣 水谷 良子

電線につもれる雪の寒雀
 名古屋市 福田 眞吉

六年間缺席もなく卒業す
 越中 佐伯 光安

大寒の寒さのさすが肌にしむ
 大津市 三木 正孝

舞ひく雪我庭に入りきたる
 名古屋市 鶴田 稱眞

呆として試験のすみし夕かな
 楚鐘應召して

鐘樓の針がね吹かれ寒の風
 北海道傷療所 高島喜八郎
 たらちねの指の跡かと餅の面に

大阪市 吉岡 光雄
 下駄の面のひんやりとして冬の夜

石川傷療所 大森 玲二

三つ星の戎衣にかへる春の夢
 若松市傷療所 青木 惣一

夏陽洩るをみなご翼に銚を打つ
 満洲 鶴岡 慈禮

チカ／＼と陽に煌くは霧かな
 大分縣 石堂 柑山

モンペはくがかはいく見えて麥を
 踏む

日向追うて母の運ばや梅の鉢
 京都府 福島孝治郎

篝火を浴びつつ續く初詣
 東京府下 萩原 通孝

木枯を誰か訪ふらし靴の音
 京都市 近藤 青牛

寒椿藥小屋崖に傾ける
 大分縣 梅田 徳一

明易き雀の聲となりにけり
 崎玉縣 杉浦 文治

星空の寒さが今朝の霜となる
 北海道 花田 順往

三千年のむかしを今に花まつり

投稿規定

官製はがき一同二句以
 内とし、住所氏名明記
 作上「俳壇」欄に
 照係あてて送ること



重石も船にのせられて行く

……法然上人法語解説(その十六)……

中村 辨康

法語

源空は殿上へまいるべき器量にてはなけれども、上より召せば二度までまいりたりき。これはわがまいるべきしなにてはなけれども、上のおんちからなり。まして阿彌陀ほとけの御ちからにて、稱名の願に答へて來迎させ給はんことは何の不審があるべき(や)。わが身罪おもくして無智なれば、つや／＼佛の願を知らざるものなり。かゝる罪人どもをやす／＼と助けはん料におこし給へる本願の名號を唱へながら、ちりばかりも疑ふ心はあるまじきなり。(十二問答の内第十問の答)

たとへば重き石を船に乗せつれば沈むことなく萬里の海を渡るがごとし。罪業の重きことは石の如くなれども、本願の船にのりぬれば生死の海に沈むことなく必ず往生するなり。ゆめ／＼我が身の罪業に依りて本願の不思議を疑はせ給ふべからず。(十二箇條問答第一問の答)

解説

先きのたとへの如く船にのりぬれば、目しひたるものも目あきたるものも共に行くが如し。智慧のまなこあるものも佛を念ぜざれば願力にかなはず、愚痴のやみふかきものも念佛すれば願力に乗するなり。(十二箇條問答第二問の答)

自力他力の問題は昔からはつきりしなかつたものと見えて、色々論議されて居

る今日に到つても尚ほ「他力本願では駄目だ」などと引き合ひに出されたりして、他力と云へば寄りかゝり主義の如く感じて、敢へてこれを考究して見ようとしないのであります。畢竟は相對的な觀念論であつて私達自らの反省の足りないことがこんな問題を起させたのであります。そしてそのはつきりした考へがこの法語なのであります。

さて、法然上人が宮中に召されたことは高倉天皇を初め奉り後白河法皇や上西門院宮宜秋門院修明門院等の高貴

の方々から御授戒の恩命が下つたことから見て、疑へない事實と存じますが、この御法語では「二度まで殿上した」ことが明らかにされて居ります。これは禪勝房の質問に對しての御答へだと推定されて居ります。次の十二箇條問答の方は或る婦人への御返事で、恐らくは御自筆のものであつたらうと云はれそれは兎に角としてこの初めの御法話に示されたやうに、相對的な自他分別を超えたものが本當の他力でありますから、むしろ他力の正しい理解に自力とか他力とか云ふ考へから一度抜け出してしまはねばいけないのではないかと思ひます。即ち「勅命」と云ふ事實の前には自力も他力もあつたものではないからであります。つまり自他分別などを穿索する餘地などは、全然ないのであります。ただ御召しに従ふばかりのこととあります。随つて事の善惡や自他の差などは批判の外にあるのであります。

この宮中に召されることは、おかみの御覺召に依ることでありまして、こちらが高位高官であらうが、また無位無官であらうが、それは問題ではないのであります。即ちおかみにのみ絶對の御力があるのであり、こちらには全然力はないのであります。これを宗教語で「他力」と云ふのでありまして普通に言ふ自他相對の他力ではないのであります。

す。そこには「何の爲」と云ふやうなものは何もないのであります。こちらとしてはただ仰せのまいであります。承諾必謹の誠があるだけであります。ですから「ただ仰いで他力を信ず」と云ふのであります。決してよりかいり主義で云ふのではありません。絶對的信憑なのであります。

これは我が國のやうな全一的な國體の中に育てられて居る私達なればこそ、かうした佛の本願力も素直に受取られるのであります。が、一時米英思想に養はれた爲に、目を暗くされてこの宗教上の他力が判らなかつたのみであります。従つて使つてはならないところに、「他力本願ではいけない」などと、つまらない引合ひをしたのであつて、今まで如何に米英的教育に依つて無反省にさせられてあつたかを反省しなければならぬと思ひます。

また何んなに罪深い者と雖も、或は何んなにうすぼんやりして居る愚か者といへども、又は何んなにぶら／＼なまけて居るのらくら者といへども、一たびお召しにあづかればシャンとして立ち上り覺醒一番勇戰奮闘する忠誠の士となるのであります。が、その心的轉換を宗教的に表現したのが淨土教の信であります。

私達が己が命を捧げる氣持になつた時ほど強い時はあり

ません。これが一旦緩急ある時の日本人の氣持であります。そしてこれがまた淨土の信に徹した時の氣持であります。これは一にして二、二にして一のものであつて決して二心ではありません。私達をして言はしむれば「淨土の信」と具體的にしたのが「忠誠心」であります。だからはつきりした忠誠心を把握して居る人はみな淨土の信を持つて居る人でありまゝ。こう云ふと、然らば日本人は皆な淨土の信仰人と均しいものであるから、何も改めて淨土の信をのべる必要がないではないかと云ふ人があるかも知れませんが、それはまだ一を知つて二を知らぬものであります。意識するとしなひとの差は大きいものであります。況してそれをもつと意識的に擴充せしめる必要のあることは言ふまでもないのであります。誠に淨土教の信は私達の忠誠心を一層意識し擴充せしめる最良のかてであります。西郷隆盛は「金もいらぬ名譽もいらぬ命もいらぬ人ほど始末におへぬものはない。然しかゝる人でなければ共に語るに足らぬ」と云はれたさうでありますが、さう云ふ人を作るのが淨土教の信であります。

世界無比の國體にはぐくまれて居る私達は、陛下のお召とあらば一も二もなく金も名譽も命も捧げて何の悔ひもな

いのですが、然し平素の生活では中々さう云ふわけには行かないやうであります。闇取引は仲々止まずに行はれて居りまして、横流しなどもかなり行はれて居ります。衣料切符の點數が引き上げられると聞けば直ぐ呉服屋の前には人が殺到いたします。第一線に立つた人の氣持とこの氣持とは雲泥の差ですが、然し二つとも同じ日本人の氣持であることに相違はありません。

こゝが人間の弱いところであります。そしてこゝが信仰人かさうでないかの分岐點でもあります。誰にしたつて命はおしいのです。金もほしいです。物もあるうちに買溜めをして置いて不自由のない生活をしたいのです。然しそんなことではこの現在の非常時局を乗切つて行かれませんか。一億の國民が我れも／＼と勝手氣儘をやつて居たら何うなることとせう。こゝが我慢のしどころです。誘惑はいくらもあります。魔手は到るところに「おいでおいで」をして居ります。

然しその惡魔は遂に降伏させなければなりません。釋尊の御一生に取つて降魔成道のあの一と時だけが降魔ではなく、あの時以來「降魔成道」の生活が始まつたのであります。佛所行讚などにも時々惡魔が來て釋尊をなやますこと

が書いてあり、釋尊も時には惡魔に對する感想をおもらしになられたやうであります。然も何時もそれを棄切つて勝ちつゞけられたのであります。この惡魔の手を敢然として拂ひのけた生活が釋尊の信仰生活であり成道の成道たる所以を明らかにされたものであります。いま淨土の信仰生活はそれを如來の本願力に依つて拂ひのけ、一步一步白道を選びつゝ歩るかせて頂くことなのであります。

無論鬼もすれば如來に歸命する心を忘れて、ツイ誘惑にもまけ勝たぬではありませんが、それを隨懺しつゝ段々清められて行くのであります。私達は元より罪深いものであります。それは全く重い石にも譬へられるものであります。普通ならば鐵鎚の川流れで一生浮ぶ瀬はありません。然し、「南無」と呼ぶ心に應じて來迎し給ふ如來の大船は、この重い石をのせて生死の海を渡して下さるのであります。

毎日毎日の生死の海に漂ひつゝある私達の生活は、如來様に南無し信順することに依つて、一步一步彼岸に近づかさせて頂いて居るのであります。それは眼に見えずとも本願の船に乗せられて居るからであります。ですからこちらの力の有無や罪の輕重を沙汰する必要はありません。イヤ人間は皆な罪の子であつて、その點から云へば五十歩百歩

の間の差に過ぎません。基督が「罪なき者は打て」と云つた時、誰一人前へ出たものがなかつたやうに私達は皆同一價値のものであります。あの人はえらいの、この人は悪いのと勝手な批評はしますが、さて一步一步退いて自分を反省して見れば、決して清淨無垢なものは一人もないのであります。然し有り難いではありませんか。一度本願の船に乗れば、智者も愚者も善人も惡人も皆平等に救はれて行くのです。一等も三等もありません。みな並等なのであります。然も瓦礫變成金して「諸上善人俱會一處」となるのであります。誠に有り難い極みであります。

かくの如くして誰もみな如來大悲の光の中につゝまれて生活することが出来るのであります。イヤ現に包まれつゝ生活して居るのであります。かくて常にそれを意識すれば惡魔は降伏されるのであります。私の力がするのではなく、如來様が働いて下さるのです。然るに鬼もすれば如來様から離れ「諸上善人俱會一處」から離れて一本立ちの自我主張の人になり下がる爲に、常に悪いことに手を出し口を出して恥をかき頭をかいて居るのであります。

されば私達をもつと、淨土の信を深めて如來様の光被を仰ぎ、本當の人生を完うしたいものであります。

編輯後記

◇本會理事木村玄俊師は急性肺炎のため病床にあること僅か三日で去る二月廿八日西遷されました。

師は明治廿五年一月一日富山縣西礪波郡林村野澤五八郎氏三男として生れ、昭和七年三月に小石川區傳通院貫主となられ、東京教區教務所長を経て現に淨土宗務所財務部長、東京養老院理事長その他幾つもの要職につかれ各方面に活躍し、大きな功績を残してゆかれました。享年五十二、まさにこれからと囑望されながら劇務と病魔に遂に倒れました。師の頭腦明晰、圓滿なる人格は今さらながら惜しまれてゐます。法名は慈恭心院明蓮社贈正僧正徹誓照阿慧光玄俊大和尚、合掌。

◇眞野正順先生はこの頃すつかり御元氣です。家にゐても手から本を離さず、南方宗教政策に一家言

を持つて來訪者を叱咤されるといふところに先生の面目がありまゝです。近く本會から刊行すべく隨筆集を御執筆中です。

◇中村辨康先生はまだ身體が全快してゐないと御自分でいひながら八面六臂の活躍をされてゐます。近く鎌倉光明寺に常設的に開かれる信行道場の主任として同地に赴かれる筈です。

◇主事佐藤賢順氏は殆んど快くなつて、近頃は自坊にゐられる方が多いやうです。「空について」は三回連載の豫定で、今回は説話的に述べられることになつてゐます。

◇會員の川口丈太郎氏は去月中ば西化されました。同氏はこれまでよく長文の通信を寄せられ、法然上人の御遺徳に感泣してゐる様がよくわかりました。毎月二回位、多い時は四回位缺かさず通信してきました。それが二月號の本誌が受取人死亡の附箋つきで戻つてき

たときは云ひ知れぬ淋しさを感じました。

◇吉田絃二郎先生からいつもながらお忙しい中を玉稿を頂きました。玉稿の一言一句は先生の毎日の生活そのまゝ寫したものです。先日も銃後の國民は經濟の許す限り公債を買ふべきであると、可成り多額の公債を購入されました。

◇尾上菊五郎丈から藝談を頂き、さすが名人であると感服しました。舞臺で盲人を演ずる時は、樂屋を出るとすぐ目を閉ちて決して途中で細目でもあかぬさうです。

◇菰田康一閣下から市會開會間際のお多忙中を玉稿を頂きました。

◇安藤嶺丸師は花祭りの創り親として著名であり、花祭りの安藤師といはれる位で今でもますます花祭りのために活躍されてゐます。

◇荻原賢次氏は歸還したばかりで體験が生々しくて描き難いといつてゐました。

(村瀬)

淨土 四月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年三月十日印刷納本
昭和十年四月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園十五號明照會館
編輯兼 眞野正順

東京市芝區芝公園十五號明照會館
發行人 眞野正順

東京市芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾光雄

東京市牛込區神保町七(東東一)
印刷所 大日本印刷株式會社

東京市神田區淡路町二ノ九
配給元

日本出版配給株式會社
發行所 法然上人讀仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料一錢)

會費 金一圓五十錢

(送料共)

一ヶ年

強腦強精に光明丸



腦病全身神經
系諸病腦溢血
鼻耳小心恐怖
腦毒症神經痛

主治

腦病、神經病、腦神經衰弱、不眠症、ヒステリー、てんかん、ヒキツケ、小兒麻痺、腦膜炎、腦毒症、腦溢血、高血壓、半身不遂、心悸亢進、耳鳴、逆上、頭痛、頭重、行首コリ、(神經衰弱、耳病、多夢惡夢、頭腦力記憶力思考力減退、健忘症、小心恐怖症、恐迫観念、憂鬱症、取越苦勞雜念妄想、胃腸障害。

光明丸は腦疾病、神經系統の疼痛や硬直麻痺、動脈硬化、高血壓を治療し、神經を強め、腦液や全身の病毒、瘀血等を除去し、血行を整へ、全身を賦活し、種々の不快苦痛なる症状を除取、其の安眠に導き、強腦強精ならしめ、頭腦力記憶力思考力を増進せしめ、心身共に健全明快に導く、即ち根本原理に即した合理的優秀薬であります。

試供薬と
説明書を
進呈

本名張功、特許
商標、注意
偽造品あり
注意

價目

大瓶 六日分
小瓶 三日分
各瓶 二日分

(本舖) 京都伏見のなり山

願成閣
全國一流賣藥卸賣會社